

社会工学研究会 多摩学研究

中里介山・白州次郎にみる  
成り上がり新中間層と多摩地域の関係

多摩大学経営情報学部

三谷 明史

高橋 豪

山田 真里帆

中川 英之

多摩大学グローバルスタディーズ学部

丹 有紗

多摩大学大学院

原 智恵子

## 目次

はじめに .....	2
<b>第1章 時代背景</b> .....	3
第1節 明治・大正・昭和時代の社会階層とその変化.....	3
第2節 新中間層 .....	3
第3節 中里介山・白洲次郎の位置していた階層の変化.....	5
<b>第2章 中里介山</b> .....	6
第1節 生涯に亙る概要 .....	6
第2節 東京に憧れた時期 .....	7
第3節 東京で成功する時期.....	15
第4節 アイデンティティを探す時期 .....	20
<b>第3章 白洲次郎</b> .....	33
第1節 イギリスでの人脈作りの時期 .....	33
第2節 日本での人脈作りの時期.....	37
第3節 フィクサーとして活躍した時期.....	38
第4節 本章のまとめ .....	44
<b>第4章 まとめ・考察</b> .....	46
第1節 2人の共通点.....	46
第2節 2人の成り上がりの評価 .....	46
第3節 多摩地域と成り上がり新中間層の関係.....	47
参考引用文献.....	49
謝辞.....	50

## はじめに

今年のテーマは「中里介山・白洲次郎にみる成り上がり新中間層と多摩地域の関係」である。東京で一応の成功をおさめた後、晩年になって、多摩地域に居を構えた中里介山、白洲次郎を通して、彼らの所属していた新中間層という明治末期から大正にかけて新たに生まれた階層が拡大していくなかで、どのように成り上がろう（社会的上昇）としたのか、またその過程で、彼らにとり多摩という地域はどのような役割を持ち、どのような特性を持っていたのかを、推論したものである。

第1章「時代背景」で当時の社会階層の変化と、成り上がりの定義について述べる。次に、第2、3章で中里介山、白洲次郎について、2人の人生の流れや変化をみる。中里介山については「東京に憧れた時期」「東京で成功した時期」「アイデンティティを探す時期」に、また、白洲次郎については「イギリスでの人脈作り」「日本での人脈作りの時期」「フリークサーとして活躍した時期」にと、それぞれ3つの時期に分けたうえで、成り上がりの視点から彼らの人生をまとめてみた。

最後に第4章で、この2人の共通点を導き出し、そこから2人にとっての多摩地域とは何だったのか、また、彼らを通して明治後期から昭和にかけての新中間層と多摩地域の関係から導き出される多摩地域の特性を考察した。

## 第1章 時代背景

中里介山（1885～1943）・白洲次郎（1902～1985）の二人が生きた時代には生年で17年の差があるものの、明治後半から昭和前半という激動の時代に生きた人物である。本論文ではこの二人に焦点を当てて、その生き方の共通性を見出すことを目的としているが、具体的人物論に入る前に、近代化の波に洗われたこの時代に、社会構造はどのように変化し、人々はどのように生きたのかを、時代背景をもとに考えてみる。

### 第1節 明治・大正・昭和時代の社会階層とその変化

社会の変化を見るにあたって、我々は階層社会の変化に着目することにした。明治時代以前から社会には階層があり、経済力や生活様式などから、おおまかに上層・中間層・下層という3層からなっていた。明治維新以降になり近代化が進むにつれ、四民平等の政策のもと身分制度がなくなったこともあり、それまでの社会階層は崩れ、変化していった。

士族などの時代の流れの中で力を失った人々は上層からはずれ中間層に落ちていき、一方で下層にいた小作などの人々が農村から都心にでてきて新中間層として中間層にあがっていくといった階層間移動という変化がおきた。また、中間層のなかでも、農家や商人など自営で暮らしていた旧中間層から新中間層へと移動するといった変化もあった。

江戸時代に形成されていた士農工商の中で固定化されていた階級が維新によって崩れ、新しい階層の中で能力さえあれば上の階層へ上がれるようになった明治後期、この頃から経済発展の影響で中間層の層が厚くなっていった。その結果、大正初期から新中間層が生まれるなど新たな階層が形成されていったのだ。この時代は個人の能力次第で上の階層へ上がる期待を持てた明治維新～明治後期とは違い（同様の期待は戦後復興期にも表れる）、社会の組織化が進み能力を発揮する機会が減少し、親の経済力や人脈が本当の意味の上位層（指導者層）への階層間移動に重要な役割を果たすようになってきたという現実があった。

このような社会変動を背景に、新中間層は生活水準の向上や社会地位的向上を目指した人々のいた層といえるだろう。新中間層には限らず、個人がより上の層に上昇する社会的上昇を果たそうという動きが大正期から昭和前期にかけて活発にあったといえる。この個人が自らの位置する階層の上昇をはかる一連の行動のことを本論文では「成り上がり」と呼ぶことにする。

### 第2節 新中間層

新中間層とは、近代化の流れのなかででてきた新しい中間層の形で、会社員や教員などの公務員として働いていた人々により形成される層で以下のような解釈がなされている。

*新中間層、すなわち旧中間層（自営業者、地主・自作等）とも肉体労働者とも区別される頭脳労働者の階層は、近代社会の成立とともに生まれたもの*

文献 11)『日本の階層システム 1 近代化と社会階層』 p48 から引用

明治 43 年～昭和 4 年にかけては、都市化が急速にすすむ時期である。(中略)都市化の進展は、(中略)都市の構造にも影響を及ぼし、会社員・銀行員を中心とするサラリーマン層——都市における新中間層を、階層として登場させる。

文献 13)『日本全史』 p 1026 から引用

上記の定義で明らかなように、新中間層は、以前の間層が自営により得ていたライフスタイルとは異なり、頭脳労働者としての新たなライフスタイルを形成していった。また、彼らの多くは大都市（東京）に集中するようになる。この時期、新中間層あるいは上位層を目指す若者は、「東京に出て一旗あげる」という考え方が常識となった。

都市の新中間層は、独自の生活スタイルをもち、都市に新たな文化をつくりあげた。彼らはおおむね、主婦と子供による核家族をいとなみ、月給による消費生活をおくる。

文献 13)『日本全史』 p 1026 から引用

前述したように、新中間層は上層から落ちた人々、下層から上がった人々、そして旧中間層からライフスタイルや仕事などが変化した人々など、幅広い層の出身者によって構成された。出身によって職場や学歴に差があり、それによって給与や生活にも差があった。

新中間層が確立されてくると親の生活によって、その 2 代目となる子弟の受けられる学校教育に差があるものの、いずれも親のもつ学歴以上の教育を受けるまでにはいたらず、親と比較的同じクラスの職種につくといったように、新中間層を構成する人々が増えていくという性質をもっていた。

ここで注目すべきは、新中間層に位置する親は、子弟に対して出来る限りの教育をさせようとしていることである。特に下層や旧中間層出身者の親は、子弟の教育をより高度なところまでさせたいと思っているが、稼ぎがすくなく生活も困難なのでできないといった状況であった。この傾向は第 2 次世界大戦後の経済発展期になると、ますます顕著になり、

大企業および官公の専門・管理は子弟に、非常に高い教育を与えている。(中略)この子弟らは卒業後、(中略)5 割以上が大企業や官公庁の雇用ホワイトになっており、そのなかでも 1 割以上が再び、エリートである専門・管理職に就いている。(中略)ところが下級官吏や銀行員・会社員からなる非エリートの新中間層では、子供は是非とも教育したいがままならぬという、悩みが聞かれる。(中略)学歴の違いは収入の違い、出世の可能性と速度の違いとなって、中学卒業者に経済的なハンディを負わせる。ゆえに、彼らの子弟の多くはおそらく大学まで進まずに就職することになる。(中略)エリート層へ

の参入率も低い背景には、こうした事情があると思われる。

文献 11)『日本の階層システム 1 近代化と社会階層』 p58, 59 から引用

という事態に至る。

いずれにしろ、明治末期から昭和初期にかけては、旧幕体制を打破し、能力ある者が、指導者層にのしあがる姿をみて、親の階層から成り上がることを夢見、新たな階層の固定化という現象の中で自身の成り上がりに多くの若者があがっていた時代であった。

### 第3節 中里介山・白洲次郎の位置していた階層の変化

では、中里介山と白洲次郎はそれぞれどの位置にいたのか。中里介山が生まれた中里家は精米業を営んでいた旧中間層に位置する家だった。その後教員の職に就いたり、都心にて電話交換手や記者などの仕事をし、新中間層に位置していった。それから記者の仕事の傍ら小説家として執筆活動をしていた介山は小説『大菩薩峠』が売れると、都心では大衆小説家としての名声と経済力を手に入れ、以前の新中間層としての位置よりも上の層に上昇する。しかしあくまで大衆小説家なので、上層には至らず、純文学作家と同じ土俵には上がれなかった。そうしたなかで介山は『大菩薩峠』を書き続けつつも、青梅や羽村といった多摩地域に居を移し、そこで塾経営など教育の場を作っていく。介山は、確立しつつある階層の打破を目的としていたのではないだろうか。明治期に創りあげられた新階層の拠点である東京に対抗して多摩の地を新たな平等社会（農本主義）実現の拠点としたかったようだが、いずれも自身が教えるわけでもなく、さらには失敗に終わってしまう。塾経営によってさらなる社会的上昇を果たそうとしたと考えられるが、うまくはいかなかったのだ。後に衆議院選挙にも出馬するも、それも失敗に終わった。

白洲次郎の場合、白洲家はもともと武士の家で上層に位置していたが、明治以降の廃刀令や四民平等の政策によって祖父退蔵の代に士族としての特権を失った。そんな中で父は白洲商店を興し貿易業で成功し、新中間層としても最上位にのしあがることになる。そんな中で文平は更なる上昇の期待を込めて（上層階級への成り上がり）、息子次郎をイギリスへ留学させたと思われる。帰国してからは当時も上層として健在していた華族（伯爵）の娘・正子と結婚し、人脈を使い上層の人間と付き合いを深めていく。

これらのように介山も次郎も成り上がるために、自身の能力だけではなく、別の何かを求めていたと思われる。それは次郎の場合は人脈であり、介山は東京に対抗するための拠点となる土地であった。彼らのこうした行動の背景には、社会階層などの時代の変化に大きく影響されてのことである。

## 第2章 中里介山

この章では中里介山（1885～1943）の生涯を成り上がりという切り口から調べ、どのような社会的上昇をめざしたかを、考察する。

### 第1節 生涯に互る概要

この項では、中里介山の生涯について簡単に記す。

中里介山（以下介山）は本名を中里弥之助という。1885年（明治18年）4月4日に神奈川県西多摩郡羽村（現在の東京都西多摩郡羽村）の多摩川畔にあった水車小屋で中里家の次男として生まれた。中里家は父である弥十郎、母ハナ、早世してしまった長男の一郎、長女のイネ、そして介山がおり、その下には2男4女の兄弟がおり、計11人の家族構成である。

父の弥十郎は介山が生まれた頃は、精米業を営んでいた。家を支えるために始めた精米業だったが、順調だったのは始めのころだけで、段々と衰退に向かい、また父の賭け事好きな性格もわざわざしてしまい、田畑を人手に渡すといったこともしていたようだ。

介山は、晩年に小説家として大成したが、その才能の片鱗は少年のときから表れていた。というのも、彼は4歳のころから歴史物語の絵本などを好んで読んでいた、10歳のころには、通っていた西多摩小学校尋常科を学業優等で卒業している。その後は、西多摩小学校高等科に進学し校長の佐々蔚から目をかけられ個別に教えを受けてもいた。なお、この頃より「平家物語」を愛読し、暗記しようとするなどの努力をしていたり、「少国民」を愛読し投書を試みていたのである。このように、幼いころから、後の中里介山像を見受けることもできる。

その後は、電話交換局の仕事や学校の教員の職を経て、1906年（明治39年）に都新聞（現在の東京新聞）に入社、ジャーナリストとしても働いていたが、都新聞に在籍しながら都新聞に掲載した「大菩薩峠」が人気となり、作家として注目されるようになっていった。1920年（大正9年）に介山は都新聞を退社し、この際「大菩薩峠」を福岡日日新聞という地方新聞に好条件で連載する手筈だったが、都新聞の松岡俊三が熱心に介山を説得し、最終的には再び都新聞に連載することとなった。

そして介山は、「大菩薩峠」を連載する傍ら、多くの著作を世に出している。1922年（大正11年）ごろからは塾経営にも挑んでいるが、こちらは第3節で詳しく述べる。また、この頃より介山は、まるで自分の居場所を求めるかのように、旅をよくするようになっていく。旅で訪れた場所は九州、大阪、奈良など全国各地に及ぶ。

晩年の介山は執筆・旅に加え講演の仕事が増えていたが、それでもますます活動的になっていた。1931年（昭和6年）1か月の中国旅行。1935年（昭和10年）には衆議院選に突如立候補するも落選。1939年（昭和14年）にはアメリカ旅行を行っている。その後も「大菩薩峠」の執筆や旅を続けていたが、1943年（昭和18年）4月22日に腸チフスのた

め入院、28日午前8時15分に死去した。これにより、「大菩薩峠」は未完のまま終わる。

## 第2節 東京に憧れた時期

以下の節では、介山を「東京に憧れた期」「成功と挫折を知った時期」「アイデンティティを探す時期」と3つの期に分け、それぞれの時期で彼は何を目指したのか、どこまで成功したのかを文献「中里介山の原郷」「中里介山伝」「中里介山～孤高の思索者～」などで述べられた事実を基に論述する。

表1 中里介山年表（東京に憧れた時期）

西暦	元号	年齢	出来事
1885	明 18	1	西多摩郡西多摩村に長男として生まれる
1888	21	4	伝家の脇差にて村の少年を切りつける 歴史物語の絵本などを好んで読むようになる
1890	23	6	西多摩小学校へ通い始める
1892	25	8	尋常科3年生 父（中里弥十郎）の転業に伴い相州横須賀へ移住、横須賀小学校第二学年に転校（翌26年4月12日迄在住、この間に都会語を覚える）
1893	26	9	尋常科4年生 多摩西小学校へ戻る
1894	27	10	4月3日尋常科卒業、学術優等であった 高等科1年へ進学、校長（佐々蔚）の薫陶を受ける この人による武士道的教育は彼の生涯に大きな感化を与えた
1895	28	11	少年性の発揮を見る 「少国民」を愛読し投書を試みる 「平家物語」を愛読し反覆熟読暗誦しようと努力する この本は当時代の座右書
1896	29	12	高等科3年 学校教育の傍ら村の妙心寺派禅福寺僧田島確讓に学ぶ（1か月） 小学校の教員助手を務める 少年夜学を率い始める15人～2, 30人、胆錬会、わらじ作り、輪講（少国民、少年世界等）場所は村の蚕舎。 週費1銭乃至5銭を油代としていた
1897	30	13	高等科4年 「少国民」に投書を試みる（同輩に大口喜六・千葉亀雄 小山内薫・河野省三）父よろこぶ 佐々先生の下に寄宿し勉学する、国史略、十八史略を学ぶ



			中国史略を熟読する。日本文学全書で徒然草、竹取、源氏、太平記を読む
1898	31	14	高等科卒業
1899	32	15	村の先輩に英語を学び始める 上京向学に燃える 羽村亀吉の世話で霞町理学士の西松次郎に紹介される 後に石田（元世話人）邸宅に移り 11 月電話交換局の入試（相当厳重）をパスする。同局は夜勤勤務で勉学に好都合だったため。 浪速町分局にて見習いとなる（日給 7 銭、交換士は 25 銭） 後に新橋勤務となり 25 銭となる（当時の下宿代 6 円 50 銭） 傍ら市内の英数国漢塾に通う。諸名士の講演を聞く 石田宅から芝の炭屋宮川氏の 2 階にて自炊生活を行う 鉛筆代に困る、実家の貧困を知る このころから松村介石に傾倒する
1900	33	16	5 月電話交換局をやめ帰郷する。郡の講習会（3 か月）終え母校の代用教員となる（4 円 50 銭）、このとき久保川きせ子と出会い、青梅福音教会に通うようになる
1901	34	17	上京し「日本政記論文」「国史鑑」「金色夜叉」「イソップ物語」を購入。東京劇場にて高田実の芸を観劇。雑誌「太陽」を愛読 ユーゴーに傾倒するようになる
1902	35	18	3 月 10 日佐々先生死去。 正教員の試験を受験する 6 科目を 1 度にパスし驚異といわれる（習字・体操は不合格） 羽村にキリスト教講義所を設立 幸徳秋水・堺利彦・山口孤剣らと会う
1903	36	19	体操課合格。月給が 8 円となる。 雨天時などに体育の授業で創作話を話し生徒は傾聴した（大体、三国志・漢楚軍談・水滸伝・八犬伝を簡単にしたもの） 山間の学校を志望するが却下される（上京の金とするため） 五日市町に転任を命じられ辞職。上京する。 耶蘇教会に通うようになる。暫くして岩渕町（赤羽）小学校の代用教員となる（月俸 10 円）6 月 12 日正教員となるも 9 月 20 日辞職（久保田金四朗と同居） 社会主義に影響される。

1904	37	20	社会主義化が甚だしくブラックリスト的存在となる 内村鑑三の紹介で麻布慈育学校（曹洞宗貧困学校）で教鞭をとる。次いで愛宕（アカガ）小学校に転任。下谷真島町に住む ※「平民新聞」に「水火ノ賊」を投書し注目を惹く
1905	38	21	徴兵検査を受けるが皮膚脆弱で乙種不合格だった 6月、社会主義から離脱宣言「予が懺悔」を発表 8月、幸徳秋水と大議論 「村夫子」として活動開始 社会主義だけでなくトルストイを読むようになる 平民社の安部磯雄とともに翁の非戦論の手紙を送るが逆に翁に叱責される。これより翁を崇拝する注意人物となる トルストイに傾注し徳富蘆花を訪ね翁の宗教について聞く トルストイ・エスマン・法然上人に参学する

※「羽村市郷土博物館紀要第8号 特集 中里介山」を基に作成

表1は、介山が生まれてから21歳までの略歴をまとめたものである。本論文では、この期間を「東京に憧れた時期」と呼ぶことにする。

表1にある通り、介山は多摩の羽村で生まれ育った。しかし8歳から1年間、父弥十郎の仕事の都合で相州横須賀へ移住している。これはおそらく弥十郎の行っていた精米業がうまくいかなくなり、工業が栄えていた横須賀へ行き一攫千金を夢見ての移住ではないかと思われる。しかし翌年1893年には再び羽村に戻り、一度は離れた西多摩尋常小学校へ再度入学している。この横須賀移住は介山に衝撃を与えたのではないだろうか。農村風景の広がる多摩の羽村と港や工場の広がる横須賀の街、この差は少年介山にとって大きな衝撃を与えたことだろう。

羽村に戻った介山は再び西多摩尋常小学校へ入学し学業優等で卒業する。その後尋常小学校高等科へ進学するが、ここで介山のその後の人生観に大きな影響を与える人物と出会う。多摩西小学校校長の佐々黙柳という人物だ。彼は加賀藩士で維新時代には蛤御門の変に参加、藩から選ばれて長崎へ留学もしている。西郷従道の台湾征伐には書記のような役目を帯びて従軍したのち、千葉の感化院につとめていたことがあった。

佐々先生は若いころ羽村へきて子弟教育の任にあたったが、人望があり、いったん感化院に戻ったが、羽村の人々は清廉な人柄の佐々先生をいたく気に入り、こぞって呼び迎えに行き、それ以降、佐々蔚は生涯を独身で羽村の教育の為に尽くしていった人である。彼は人柄も教育も、厳格な武士道教育の権化のような人だったが、酒を飲むと天真爛漫になったという。

この師ともいえる佐々黙柳を、介山自身が語った言葉が「中里介山伝」に紹介されている。

「十、十一、十二、十三歳ごろが、私の少年性の目覚ましい発揚を見た時であった、いまでも十三歳という年が、画期的の年齢であったように、なんととはつかず記憶している。」と、述べた上で

「この私の生涯に大感化を与えた人、幼少時代にこの人の教育が私をこしらえたといってもよいくらいである。」

文献 3) 「中里介山伝」 p62 より引用

このように、佐々蔚を非常によく書いている。では、佐々蔚が介山に行った教育とは、どのようなものだったのだろうか。

教わっていた内容としては、国史略 5 冊を繰り返し読ませられたり、十八史略を少し教えてもらっていたらしい。また、先生からは忠孝倫理と共に、男子は天下国家を以て任ぜねばならぬ。ということを教え込まれていたようだ。介山にとって、これらの教育も勿論大きな影響を与えたが、一番大きなことは佐々先生が蔵書家であったことだろう。彼の蔵書には歴史、国文、漢籍が多かったが、政治、法律、長崎留学時代の筆写のオランダ文字の稿本などもあった。また日本文学全書が揃っており、介山はその中から「源氏物語」、「太平記」、「徒然草」、「竹取物語」などを読んだ。これらを読みこんでいたことにより、介山は 13 歳とは思えない文才を身に着けたのだ。この文才は今後介山が生きていくうえで非常に大きな武器となり財産となっていくことになる。

介山が質素な生活を好むと同時に、一生独身を貫いたのも、この佐々蔚を尊敬し、彼の生き様に何か惹かれるものがあったからだろう。以降介山は女性と恋に落ちることはあっても、結婚することはなかった。佐々蔚が少年介山に与えた精神的影響はそれほどに、大きなものだったのだ。

そして、12 歳のころにはすでに、小学校の教員助手を務め、同時期に少年夜学会を主催していた。少年夜学会とは介山が地元の少年たち (20~30 人程度) を村の蚕舎に集め、輪講を行っていた。当初、介山はこの少年夜学会に参加する少年から週費として 1 銭を徴収し、その金でランプ・石油・紙・筆を購入していたが、本や雑誌を購入するには足らなかった。そこで介山は夜学の時間を割き、わらじや草履を作ることを提案した。当時の子供たちは、そのような技術を家庭で仕込まれていたもので学問を学んでいない子でも草履作りをやらせると大人顔負けの技術を見せる子もいたそう。また、子供が正直に固く結ぶので、物持ちが良く、卸値も安いので荒物屋などは喜んだ。この他にも薪を集めて安値で売るなどを行い、稼いだ金で書物や雑誌を購入し面白い部分を介山が皆に読み聞かせるといったことなどをしていたそう。

このように、幼いころからよく学んだ介山だったが、15 歳のとき上京し学びたいと思うようになった。これがおそらく彼が初めて抱いた、「成り上がってやる」といった気持かもしれない。羽村では神童とまで言われるほどもてはやされ、校長である佐々蔚に目にかけてもらうなど、介山の中で自信が出てきたのではないだろうか。「自分はこんな田舎でくす

ぶっている器ではない。」というように感じたのかもしれない。東京に行き学びたいと言った介山は、当初は家族に反対されるが、説得して上京。初めは三重県工業学校長、三重県技師である西松次郎の東京市麻布霞町の家で書生をしていたが、僅か2ヶ月で帰村してしまっただけで、理由は西家の女中が、介山に西家の長男が朝学校へ行くときに下駄をはかせてあげなさい。と言ったのに対して「俺は下男にきたんじゃない。」と言ってそのまま帰ってきってしまったのだ。7月に再び上京し、義従兄石田与三郎の下に身を寄せ、自炊をしながら日本橋浪花町電話交換局に交換見習いとして勤務していた。昼は神田正則英語学校に通い、夜は電話交換士としての仕事をしていた。なお、彼は後、下谷御徒町の分局や、新橋分局に転勤している。東京に出てきて、電話交換士の職を選んだのも、仕事が夜にあり昼は勉強ができるからという理由であった。彼はこの昼の時間を利用し、勉強や講演に出向くなどして成長していったのだろう。

この時期、再び介山にとって大きな影響を与えることがあった。それは、当時日本で初めて社会教育を主張したキリスト教指導者松村介石（1859～1939）の講演を、神田美土代町の青年会館で聴いたことである。

介山はその社会教育というものに非常に大きな感化を受けたのである。その後も松村介石の講演をたびたび聞いた介山は教育というものに大きな興味を持ったのだろう。なお、中里介山というのはペンネームだが、この介山は松村介石からとったものである。

松村介石に衝撃を受けた翌年5月には電話交換局をやめ、帰郷する。その後母校である西多摩小学校の代用教員（4円50銭/月）となる。介山はこのとき、同僚であった久保川きせ子という女性と出会い恋に落ちた。これが介山の初恋であった。この久保川きせ子は熱心なクリスチャンで布教活動も行っていた。介山は彼女に好意を向けてもらえるために彼女と同じ、青梅福音教会に通うようになる。また、2年後に羽村にキリスト教講義所を仲間と設立したのだが、これもきせ子のために建てたのではないかと思われる。

介山はキリスト教講義所を設立した年（1902年 明治35年）に正教員の試験を受験し6科目を1度に合格している（習字・体操は不合格）これは当時としては非常に驚異的なことであった。

介山は生涯を通して教師という地位にこだわっていた。初期の教員時代（羽村時代）は生徒と教員の年齢があまり変わらなかったことから、自分は餓鬼大将にすぎなかった小学校令や施行規則が厳しくなっていく、郡には郡視学ができて校内を監督して歩いていたのだが、根からの野人である介山にはそのような規則が窮屈でたまらなかったようだ。表面は末輩教員としてそれらに服従していたが、内実は餓鬼大将のようにふるまっていた。だが、やらせるべき学課はやらせ、習わせることは厳重に習わせたようだ。授業の実質はおろそかにしないが、規則偏重や郡視学への反発からか、ズルイこともやり、やらせもしたようだ。こんな話がある。

「さあみんな話をするが、他の先生がきてみよきた時の用心に、紙と筆はちゃんと前へおいて、イザといえは一生懸命に習字をしているように見せかけておけ。」

文献 3) 「中里介山伝」 p78 より引用

このように言った後に介山は自由に講談をしだしたという。生徒はその話を一生懸命に聴くなど評判はたいへん良かったようだ。このことから、10代のころから既存の教育方法にはあまり賛同していなかったようだ。また、自分が行っているような教育のほうが正しいとも思い、この経験は後の塾教育にも活かされているようにも見受けられる。

では介山はどのような場所で教育を行いたかったのだろうか。それは都会でも街でもない辺僻な山村だった。このような文章がある。

「同じ郡内でも甲州境へ行くと、猿と熊のせかいであった。その間の山村部落に点々として小学校がある。数里の山谷を越えて数十人の生徒が来り集まる。教師は一教室の中に、その生徒全部を集めて単級教授を組織する。一人の教師で全校生徒を一教室にまとめて教育する。さういふ教師の生活を同僚から聞いて、一方出京の猛志盛んなるほかに、また首を回してさういふ生活に憧れるところに、私の複雑性がある。さういふ処へは視学もほとんど視察には行かない。校長や首席に干渉される憂もない。質朴な山村の人は若い教師でも、天来の人のやうに尊敬する。生徒と共に昼寝をしたければする、今日は暑いから先生も裸になるから、お前たちも裸になれといつて裸ぬぎで教授をしても誰も咎める者はいない。

(中略)

今日、先生は誰さんの婚礼に行くから、皆おとなしく勉強してろ、といへば、おとなしく自修している。山村ではさういふやうな自由な教育が行はれていたのである。私はそこへ行きたかった。そこで一生を没頭するつもりはない。」

文献 3) 「中里介山伝」 p 80～81

この文で興味深いところは最後の「そこで一生を没頭するつもりはない。」という文である。介山はこの時期はなぜ辺僻な山村への転勤を志望したかという、まず1つは規則や群視学がないことにより、自由な教育を行えること。2つ目は農村での暮らしは都市に比べて金がかからないことと辺僻手当がでること。この2つが主な理由である。この時期の介山は東京で学ぶことこそが成り上がるための第1歩と考えていたのが、この発言につながったものだろう。

教員職に就いていた介山だが、1902年(明治35年)には影響を受ける人物と出会う。この年、週刊平民新聞を発行した幸徳秋水である。彼らと出会い、平民新聞に寄稿していた安部磯雄などの講演を聴くことで介山自身も社会主義へと走ることになる。以下のような文章がある。

「余を社会主義者に至らしめしものは、第一、幼少より一種の天才あることを自覚せるものあるに、貧困のため思ふやうに勉強できぬのみか、その好まざることをやらされ、十五の時から上京して今に自労自炊の生活を離れぬこと、第二に、余はいはゆる三多摩の中でも自由党高潮の地方に生まれたものだから、その感化で肩揚げの取れぬ中から、名家の演説を聴くことを最も好み、遠きを厭はず、何処までも赴き、その後上京して芝に住居せし頃には、職を欠勤しても日曜日には必ずユニテリアン講堂に馳せて、村井知至、安部磯雄氏等の講座を熱心に傾聴したこと、第三、貧困のために余のホームが微塵に碎かれてしまひ、これが余をして現実を激しく呪詛せしむる原因となつたこと、第四、読書によりて社会主義を明らかに知り、これを益々固く信じ得るに至つたこと等である。」

文献 3)「中里介山伝」 p 82 より引用

これは、平民新聞の第 15 号に介山が投稿した「余は如何にして社会主義者となりしか」という文章である。この文から読み取れることは、①介山は自分に対して自信を持っていたこと、②羽村の地域は自由党が盛り上がっていたこと、③介山は現実世界に対して怨みに近い激しい気持ちを抱いていた、その理由は貧困にあるということ、④社会主義を読書を通して知った。ということである。この 4 つの中で、注目すべきは③の自身の家の貧困から、現実世界に対して怨みを抱いていた、というところだ。介山の成り上がりのための全ての行動はこの現実世界への一種の絶望からだったのかもしれない。

その後介山は安部磯雄や尊敬していた基督教社会主義者の木下尚江の本などをことごとく読むなど、社会主義に益々浸かっていくこととなる。

しかし、介山は 1 年後には急速に社会主義から距離をとるようになる。その原因は 2 つあり、日比谷焼打ち事件とトルストイの書簡である。最終的に介山が社会主義運動から離脱した理由は 1908 年（明治 38 年 9 月 5 日）に起こった、日比谷焼打ち事件にある。日比谷焼打ち事件とは、日露戦争に勝利したが、日清戦争より多額の出費・多数の戦死者をだしたにも関わらず、ロシアからの賠償金の支払いが無いことに不満を募らせた民衆が内務大臣官邸や交番、新聞社を襲い、破壊し、最終的には第一次桂内閣の総辞職までつながった事件である。

この事件より 5 カ月後に介山はこのようなジャーナリズム批判を行う。

「世に扇動する物ほどこうかい悪む可きは無く、扇動せらるゝものほど無智憐れむ可きはなし。余は帝都に於ける今回の出来事に就て至大なる教訓を与へられたものなれど、それは〇に陳ぬべき限にあらず。たゞ或は放火犯として凶徒〇集として引致せらるゝもの、某大工にあらずんば某職人、某壮士の類のみ、即被扇動者の類のみ。扇動者として目せらるべきもの一人の捕はるゝ無し。余は勿論言論の自由を重んず。然れども当今の所謂論客の如く誠意も無く誠心もなく徒らに舞文して無智の人民を扇動する能事とする輩に向かつては、寧ろ目の醒めるほどの痛撃を何者かによって加えられん事を熱望せざ

るを得ず」

文献 2)「中里介山の原郷」 p 33～34 より引用

上の文は、日比谷焼打ち事件を知った介山が、諸悪の根源は民衆を暴徒になるよう仕向けた扇動者であるジャーナリズムである。よって私はこのように無智の民衆を扇動する輩が痛撃を受けることを大変強く望んでいる。といったような文である。そして介山はこの2ヵ月後に、この扇動者を新聞記者と断定する以下の文を発表した。

「此の歳に於て吾人が認めたる最大醜態は『新聞記者の墮落なりとす』」

「愚なる国民の御用新聞」

文献 2)「中里介山の原郷」 p 34 より引用

と言い、明治政府御用達の国民新聞が民衆から焼打ちされるのは当然だが、その国民新聞を攻撃する他の新聞も愚かなジャーナリストだという意味だ。この国民を扇動する新聞の中には介山が投稿していた平民新聞も含まれていたようだ。

もう一つの理由としては平民社に寄せたトルストイの書簡である。これは1904年(明治37年)6月にレフ・トルストイが日露戦争に対して「なんじ等悔い改めよ」と題した論文を「ロンドン・タイムズ」に寄稿したことが発端である。内容を簡潔に書くと、「日露戦争は人々がキリスト教の教義を忘れたからだ」つまり、人々の墮落が戦争の原因となったのだ。というような内容だった。これに対して平民新聞は同年8月7日号で「トルストイ翁の日露戦争論」として全文を翻訳し、翌号の8月14日号で「トルストイ翁の非戦論を評す」と題した幸徳秋水の批判を掲載した。幸徳秋水の批判によると、日露戦争はトルストイの言う人々の墮落が原因ではなく、帝国主義国の経済競争が痛烈になったために起こったのだ。といったものだった。もともと唯物論社会主義者の幸徳秋水らしい批判であったが、トルストイはこの幸徳秋水の批判に対してこのように答えている。

「社会主義は人間惰性の最も賤しき部分の満足(即ち其の物質的幸福)を以て目的とす、而して其の幸福は決して其の唱導する手段によりて到達せらるべきものにあらず」

文献 2)「中里介山の原郷」 p 114 より引用

と、答えている。このトルストイの社会主義批判は、介山の心に強く響くものであった。なぜなら、介山はこのときすでに精神的・思想的な問題ではなく、幸徳秋水のような唯物論、つまり衣食の問題を扱う主義だと感じていたからだ。また、タイミングの良いことに介山は、この返書の前号に「婆言」という平民社の西川光二郎と松岡荒村の未亡人とが正式な手続きをとらずに夫婦となったことを

「されど指導者の地位にあらんとする者、道徳的要○無くして可ならんや」

文献 2) 「中里介山」 p 114 より引用

と批判していた介山にとって、このトルストイの返書にあった

「人間の真の幸福は、精神的即ち道徳的にして、其の中に物質的幸福を包含す、而して此の高尚なる目的は、国民及び人間を組織せる一切の單位の、宗教的即ち道徳的完成に依りてのみ到達せらる」

文献 2) 「中里介山」 p 114 より引用

という主張はまさに介山の意を得たものといえる。

この、日比谷焼打ち事件と平民社へと送られたトルストイの書簡、2つの出来事が理由となり、介山は社会主義から急速に離脱することとなる。

介山が社会主義を離脱した理由としてトルストイの思想が大きく影響したことは上記で述べたが、彼がトルストイに受けた影響は、今後の人生において大きな意味を持つこととなってくる。介山が本格的にトルストイ思想にのめり込むのは翌年なので、第3項の東京で成功する時期で述べる。

以上が「東京に憧れた時期」の中里介山である。この時期の介山にとって一番大きな出来事は様々な主義・思想に触れ、大きな衝撃を受けたことだろう。特に彼が社会主義から離脱する契機となったトルストイの思想は、この時期ではまだ定まっていないものの、後の介山が形成する理想に色濃く投影されている。

### 第3節 東京で成功する時期

第3節では介山が東京で成功を収めた時期について述べる。表2はその時期の介山の行動をまとめたものである。

表2 中里介山年表 「東京で成功する時期」

西暦	元号	年齢	出来事
1906	39	22	中等教員検定歴史科を受験するも失敗、文才を生かして生きていくことを決意する（神田橋上にて） 都新聞社・読売新聞社に履歴書を送る。田川大吉により認められ都新聞に記者として入社 「イワンの馬鹿」を読みトルストイに傾倒していく 再び徳富蘆花翁を千歳村に訪ねる ※「トルストイ言行録」「古人今人」



1907	40	23	谷中初音町に移転する 平民新聞が週刊から日刊へなる 内村鑑三・植村正久と会う ※「ガーフィールド言行録」「フランクリン言行録」
1908	41	24	都新聞第一面の編集をほぼ独力で行う 介山の都新聞での初仕事
1909	42	25	このころより聖徳太子について学び始める
1910	43	26	武州高水山で遊んでいるときに偶然「大菩薩峠」発端の情景を見る 父弥十郎死去 秋元巳太郎と知り合う 本郷千駄木町に移転 ※9/4「高野の義賊」連載（構想は「東洋義民伝」）
1911	44	27	1月18日大逆事件により幸徳ら24名が死刑 下谷区谷中真島町に移転 ※「島原城」連載、12/12「室の遊女」連載
1912	45	28	独身者のみによる雑誌「独身雑誌」創刊、主筆となるが初号発禁、1号で廃刊となる 4月古河へ熊沢蕃山の墓を訪れる 8月信濃へ。善光寺、木曾、伊勢参宮、中央線で帰る上諏訪温泉に宿泊
1913	大2	29	※9/12「大菩薩峠（甲源一刀流の巻）」連載開始
1914	3	30	
1915	4	31	都新聞幹部に昇進 西田天香に会う 本郷に「玉流堂」を開店し弟に譲る ※「竜神の巻」連載開始
1916	5	32	7月14日安房国清澄山に詣り山上に宿泊。日蓮立宗開宣と年齢を同じとするため ※8月6日～翌3月まで「浄瑠璃坂ノ仇討」を連載
1917	6	33	7月15日～19日、那須、会津、新潟、赤倉に行く 玉流堂を根津八重垣町三十六番地に移転 ※10月25日「間の山の巻」連載開始
1918	7	34	※自家本「大菩薩峠」巻ノ一刊行
1919	8	35	夏？碓氷峠 - 軽井沢 - 横川 - 峠上 - 熊野神社、陣場ヶ原、横川、草津

1920	9	36	根津に住居、捨て子を拾う。 沢田正二郎と初めて会い帝劇を見る 主筆田川大吉郎とともに都新聞退社 大菩薩峠連載中止 ※現代小説「雪ふる道」を執筆、福岡日日新聞に大菩薩峠連載になるも都新聞に戻る 「慢心和尚の巻」を書き始める
1921	10	37	8月北海道へ。沢田正二郎一座「大菩薩峠」上演 ※5月「大菩薩峠」自巻一、至巻二、春秋社より刊行

※「羽村市郷土博物館紀要第8号 特集 中里介山」を基に作成

※は介山の著作

表2は介山「東京で成功する時期」の年表（22歳から37歳まで）である。この時期での最も大きな出来事はといえば、中里介山の代表作である「大菩薩峠」が始まったことだろう。この作品が人気作になったことで、介山は一気に社会的上昇の第1歩を歩むことができた。この大菩薩峠の成功により、彼の人生は大きく動くことになる。

では、この時期の介山はどのような行動を起こしていたのだろうか。

まず「東京に憧れた時期」の続きにもなるのだが、「東京で成功を知った時期」の始まりでもある1906年（明治39年）ごろから介山は本格的にトルストイの思想について傾倒していくようになっていく。上記したが、もともと介山がトルストイへ注目したキッカケは、彼の日露戦争論と社会主義批判だというのは間違いないのだが、その少し後に翻訳されたトルストイが書いた「イワンの馬鹿」という本が出版された。そして、この本を読んだことで、介山のトルストイに対する思いは確固たるものとなるのであった。当時内村鑑三にも接近してキリスト教を学んでいた介山だが、この「イワンの馬鹿」に書かれていた内容は簡単に述べると物質的幸福（社会主義）と精神的幸福（キリスト教）とをふたつながら可能にする神聖な労働、これはつまり大地を耕すことへの思想が書かれていた。この「イワンの馬鹿」を読んだから介山が初めて農本主義思想を書き出した「小さき理想」という本を書くまで、わずか1カ月だったのだ。この期間の短さから介山がいかにかにトルストイに感銘を受けたかを見ることができるだろう。

また、介山は「トルストイ翁の書簡」を読んだ頃から自己革命達成のために宗教・哲学・芸術など全てを包摂する労働という概念を唱え始めていた

「最も大いなる宗教はの労働なり也。最も大いなる哲学も労働也。最も大いなる芸術も労働也。労働を軽んじて宗教と哲学と芸術とに行き、その失敗して煩悶と苦痛とを与へらるゝは当然のみ。先ず働け、己の額に汗してパンを得るの人となりて、始めて宗教と哲学と芸術との真意義を解し得可し。」

と、このように労働という概念を唱えていたが、「イワンの馬鹿」を読んでからは労働とうあいまいだった概念を農業に限定したのだ。しかしこの時期いまだに生活のため教員の職に就いている介山が、農業こそ大事だ。と唱えるのもいくらかの矛盾を感じる。おそらく介山自身もこの矛盾には気付いていたのではないかと思われる。しかし、この農本主義的思想は後の塾での教育指針の中に表れていることから、この 22 歳、23 歳ころの時期に介山の理想は確立されたと考えることもできる。

この時期の教員職に就いていた介山は、中等教員の検定試験を受けるために昼間は図書館にこもり勉強する日々を送っていた。しかしその検定試験には不合格となってしまう。これまで、つまづくことなく生きてきた介山にとっては初めての失敗だった。おそらくこれを機会にと考えたのだろう。年末になり、介山は自分の文才を活かせる新聞界で生活していこうと決意し、都新聞社と読売新聞社に履歴書を送った。読売新聞社からはなんの返事もなかったが、都新聞社からは「いまは仕事はないが、そのうちに君のためになにか仕事を作ろう」という返事をもらった。その後、都新聞主筆の田川大吉郎の推薦もあり、都新聞入社が決定した。試験のときに英訳があったとも言われているが、少年のときに英語を勉強していたのがここで活きたのかもしれない。都新聞での最初の仕事は学芸欄で、新刊書（座間勝平著の「宇宙と国家」）の批評を受け持たされた。

では、教員職を辞した介山が新しい仕事に新聞社を選んだ理由はなんだろうか。実は介山は好んで新聞社に入ったわけではなかった。というのも、彼は都新聞に入社する僅か 3 ヶ月前にこのような文章を発表しているからだ。

「日本に新聞紙なし、一枚もある無し、有るものは間が祝義に対する、印刷せられたる礼状のみ」

という激しいジャーナリズム批判を行っていた。これほど嫌っていた新聞社に入社した理由は、やはり生活苦によるものだった。介山は中里家の稼ぎ頭で、一家のために自身の信念や考えを曲げねばならなかった。つまり彼の都心での生活は決して満足のいくようなものではなかったのである。

そうして介山は都新聞へ入社し、6 年が経過した 1913 年（大正 2 年）彼の人生を大きく変えることになる出来事がおこる。中里介山の代表作となる小説「大菩薩峠」の連載が始まったのだ。ここで、「大菩薩峠」について簡単に説明しようと思う。小説「大菩薩峠」は 1913 年（大正 2 年）中里介山が 29 歳から死亡する 1943 年（昭和 18 年）まで続いていた長編小説である。初めは机竜之助が主人公格でいきなり辻斬りを行うところから始まる剣豪小説である。しかし連載が続くにつれ登場人物が増え、舞台となる場所が増え、最後の

ほうは難解な介山の思想書のような感じとなっている。そして驚くべきことはその巻数が実に 41 巻という巻数の多さ、さらに途中で介山が亡くなってしまったために、未完となっているところだろう。ちなみに原稿料は 1 回分 3 円ちょっとだった。

この大菩薩峠を自身が都新聞の記者なのに都新聞に連載していたのだ。当時この小説は大変な人気を持ち、この小説のために都新聞を購入する人が現れるほどであった。その要因として、一つは机竜之助という今までにないダークヒーロー的な主人公だったことがあげられると思う。このニヒルな主人公という新しい形は当時の読者に衝撃を与えたものだろう。もう一つは今までの通俗小説にはなかった高い思想がバック・ボーンとしてあったことから、これまでは花柳界や芸能方面の新聞だった都新聞が、一般のインテリ階層にも購読されるようになった理由としてあげられる。やはり、それほど介山の文章力というのは特筆されるものだったようだ。だが、「大菩薩峠」により都新聞は部数を増やすことができたが「大菩薩峠」はあくまで大衆小説であり、対比でもある純文学とは越えられない壁が存在していた。介山は大衆小説家としては成功したが、純文学との壁を乗り越え、文学界のトップになることは無理だったのだ。

この「大菩薩峠」のヒットにより中里介山の名は一気に知られることとなり、社会的上昇、つまり成り上がるための大きな一歩となるのであった。このときに得た金銭や名声を活かし、第 3 期で塾経営などを行うことになる。しかし介山はここで大きな勘違いをしてしまったのではないかと考える。東京で様々な主義思想に触れた介山である、彼はもともと人に物事を伝えることを好んでいる、それは教師、新聞記者、小説家という今までの職種を見れば想像はできる。そんな介山なので、大菩薩峠でもおそらく自分の考えを盛り込んでいるはずだ、そしてそんな大菩薩峠が人気小説となったことで、介山は自分の考えが読者に受け入れられた。と考えたのではないだろうか。そのある種の理想ともいえるものを伝える場として、塾を設立したのでないだろうか。

さて、1906 年（明治 39 年）に都新聞に入社し 1913 年（大正 2 年）から大菩薩峠を連載していた介山だが、1920 年（大正 9 年）に田川大吉郎とともに都新聞を退社する。これは田川大吉郎に殉じたということもあるかもしれないが、社が政府系に変わったこと松崎天民というジャーナリストが入社したから、などの諸事情があったようだ。都新聞の副社長格になった介山の同期の松岡俊三は介山を説得して退社させまいと努力していた。また、この時期福岡日日新聞社が大菩薩峠の続編を原稿料は都新聞の倍の 1 回分 7 円 50 銭で、うちでやってほしいと介山に頼みこんできたこともあった。介山は一度これを了承したが、都新聞副社長の松岡俊三が直接会いに来て「君と我との友人としての意気において福日連載を中止してほしい」と熱心に説得され、ついに介山も心を動かされて、福岡日日新聞社にその旨を伝えたところ「都新聞は大菩薩発祥地だから」と快く都新聞のほうに譲ったそうだ。大菩薩峠はそれほど人気があったのだ。介山は都新聞社を退社したものの、その後も続編を連載したが、社内が政府よりになるなど、雰囲気が一変していたようで、反対にあい、連載中止となってしまった。中止させたのは松崎天民といわれている。

ここまでが「東京で成功を知った時期」の介山である。このように見てみると、作家としての介山と思想家としての介山を見ることができる。思想家としては、トルストイに受けた影響特に農本主義的なことを他の人に伝えることなどを考えていたものとする。そのためにはある程度名声・資金力が必要となるのでその調達元が作家としての介山だったのではないかと思う。

だからこそ、介山は多摩地域に戻り執筆活動と塾を軸に据えたのだと思われる。

#### 第4節 アイデンティティを探す時期

第4節では38歳から死去までの約20年間の介山について述べる。この時期の介山は東京から多摩地域に戻り塾経営に力を入れていた、他にも中国やアメリカに旅行に行くなど、活動的な晩年を過ごしていた。表3はこの時期についてまとめた年表である。

表3 中里介山年表 「アイデンティティを探す時期」

年代	元号	年齢	出来事
1922	11	38	4月武州高尾山妙音谷に草庵を営み山中での生活を始める(隣人塾) 7月東京で加藤武雄、柳田泉、平林初之輔、木村毅らと会う ※「燈籠大臣」・「小野小町」発表。「荒野の義賊」刊行 5月「小名路の巻」削筆発表
1923	12	39	上高地でキャンプ生活 竹生島、山陰道へ ※「浄瑠璃坂の仇討」出版 2月「大菩薩峠」巻4刊行 3月脚本「大菩薩峠」を白楊社より出版
1924	13	40	4月8日隣人学園を浅川の金南寺の裏に開く 5月14日九州へ(大阪、下関、福岡、鹿児島、熊本、三角、温泉岳、博多) 7月9日草津へ、8月銚子に旅に出る、 12月四国、瀬戸内小豆島へ旅行 本郷座にて市川左団次一座によって「大菩薩峠」上演
1925	14	41	4月11日大阪方面に旅行(大阪-三田) 5月奥多摩沢井へ引っ越す(高尾草庵を移転⇒黒地蔵草庵) 7月房州へ ※「吉田松陰」「隣人夜話」を白楊社より刊行 1月6日-5月12日迄、「無明の巻」を大阪毎日、東京日日新聞紙上に掲載し始める

			5月13日 - 8月27日迄「白骨の巻」 8月28日 - 12月29日「他生の巻」
1926	15	42	小滝に閑居 10月10日沢井黒地蔵文庫にて機関雑誌「隣人の友」創刊 ※1月5日 - 5月20日「流転の巻」連載 7月13日 - 10月21日「みちりやの巻」連載
1927	昭2	43	二俣尾に武術道場を開く 1月1日豊橋、三州田原、華山会、長篠、豊川稲荷、熱田、名古屋、鳥羽（一如洞） 5月9日奈良、大和へ（名古屋、郡山、生駒、信貴、法隆寺、笠置、保津川下り、法隆寺、法起、法輪寺、丹波市、飛鳥、法興寺） 11月11日東京会館に「大菩薩峠」の会を開催する ※「夢殿」6月 - 9月にわたり改造に執筆掲載、8月号分発禁 1月「大菩薩峠」巻六刊行 11月2日 - 翌4月7日「めいろの巻」連載
1928	3	44	1月青山会館で「著作心の宣伝」（小説「大菩薩峠」について）を講演（普及版「大菩薩峠」刊行記念として） - 大阪 - 京都 - 名古屋 参加者は武者小路実篤、堺利彦、田中智学ら 羽村に転居する 6月九州旅行、9月福島へ ※2月帝劇で守田勘弥一座「大菩薩峠」上演 5月22日 - 7月19日「鈴慕の巻」連載（絵：石井鶴三） 7月20日 - 9月8日「Oceanの日」
1929	4	45	耕書堂を作り始める。10月11日上棟式 ※12月「夢殿」春秋社から刊行 9月「大菩薩峠」（歌舞伎座）上演 12月バビア氏訳英文「大菩薩峠」刊行
1930	5	46	1月12日「真実と想像」を講演 6月6日記念館落成。8月同館開館式 西隣村塾を開く 印刷所を経営「隣人の友」自刊する ※4月「遊行女」出版 9月「大菩薩峠」巻8刊行
1931	6	47	藤田勇の紹介で植芝盛平の道場入門 3月阿佐ヶ谷で家を探す。5月記念館を一般公開

			<p>5月23日 - 27日自動車を始める東海道、東山道</p> <p>7月 - 8月中国（北支、満、鮮）へ</p> <p>※1月「黒谷夜話」「高野の義人」刊行</p> <p>6月15日「法然」刊行</p> <p>12月「日本の一平民として支那国民ニ与フル書」を執筆刊行</p> <p>4月「国民新聞」上に「畜生谷の巻」執筆</p>
1932	7	48	<p>2月24日「支那南北私観」講演（永楽ビル、安田社員のため）</p> <p>4月「法然上人と現代の悩み」（法然上人八百記念講演会にて説く）</p> <p>6月16日大菩薩峠に登り勝縁荘を見る</p> <p>11月隣人祭を催す</p> <p>※「切支丹夜話」刊行。3月大菩薩峠巻十「弁信の巻」刊行</p> <p>10月「不破の関の巻」刊行</p>
1933	8	49	<p>2月「隣人之友」を改巻、小さい冊子とする</p> <p>4月25日介山を中心とする第1回隣人座談会を小石川伝通会館で開催</p> <p>6月紀ノ国行脚。8月八ヶ岳に不登の遊</p> <p>※3月「青史夜話」4月「信仰と人生」「吉田松陰」</p> <p>8月「愛染明王」「小野小町」9月「清澄に帰れる日蓮」</p> <p>10月「法然行伝」「時事及政論」12月「日本武術神妙記」</p> <p>3月「大菩薩峠」十二巻「白雲の巻」「胆吹山の巻」</p> <p>7月石井鶴三との間で挿絵問題</p>
1934	9	50	<p>1月小石川金鶏学院にて隣人座談会</p> <p>11月新宿ほてい屋で「大菩薩峠」に関する展覧会開催</p> <p>第一高等学校で講演</p> <p>「隣人之友」を旧番へ戻す</p> <p>春秋社の神田氏との間でいざこざが起こり春秋社より音羽に移る</p> <p>※3月「中江藤樹言行録」発刊。7月「遊於処処」刊行</p> <p>11月「創作及著作権とは何ぞや」2月「偉人伝」刊行</p>
1935	10	51	<p>衆議院選挙に立候補するが落選</p> <p>5月両国で相撲見る、中里介山個人雑誌「峠」を創刊</p> <p>日本橋「白木屋」で個人展開催</p> <p>6月千歳村へ徳富蘆花夫人を訪ね翁墓参</p> <p>大正大学法然上人賛仰会で「聖者を描ける文字」を講演</p> <p>7月「宮中済寧館」で武術天覧試合を拝見</p>

			<p>7月 - 8月書庫の改築移転及茂太郎台の設立</p> <p>7月 (?) 「生立ノ記」 付近を撮影</p> <p>7月 29日一之江「国体明徴講演会」で日本武術論を講演 山川智応・星野梅樞・田中智学らに会い満州のことを聞く</p> <p>※2月「偉人伝」刊行</p> <p>11月 15日日比谷公会堂で映画「大菩薩峠・甲源一刀流の巻」公開</p>
1936	11	52	<p>※3月「肅選録」刊行、5月「旅と人生」刊行</p> <p>11月「漢詩提唱」刊行、11月「続日本武術神妙記」刊行</p> <p>12月「雪降る道」刊行</p> <p>4月 14日映画「大菩薩峠」第2篇公開</p> <p>4月「大菩薩峠絵本」刊行</p>
1937	12	53	<p>2月聖徳太子祭「聖徳太子ノ芸術ニ就て」講演（築地本願寺）</p> <p>3月 9日京都知恩院主催の浄土宗三高僧忌兼祖風顕彰講演会で講演</p> <p>中日日報主催「宗教文学ノ過去現在未来」の座談会に出席</p> <p>10月 25日銀座交詢社（コジユンジャ）において尾崎罌堂氏と会談 北一輝が処刑された直後に「北一輝の判決を聞く」という内容の詩を読む</p> <p>※3月非常時局論」刊行。5月「現状打開論」刊行</p> <p>6月 15日「漢詩提唱」刊行</p>
1938	13	54	<p>7月軽井沢千ヶ滝に「西来荘」を営む</p> <p>12月甥池谷廉一氏の不慮の死を聞く</p> <p>※3月「日本文学の墮落」刊行</p> <p>4月「百姓彌之助の話」を続刊し始める</p>
1939	14	55	<p>6月 1日鎌倉丸にて横浜から渡米</p> <p>6月 15日桑港上陸、6月 9日ホノルル上陸</p> <p>6月 26日ニューヨーク到着、6月 30日ワシントン見学</p> <p>※2月「大菩薩峠」第一書房より戦時体制版刊行</p>
1940	15	56	<p>※4月「百姓弥之助の話第6冊（日本百姓道の巻）</p> <p>10月「百姓弥之助の話第7冊（リンコルン角度の巻）</p>
1941	16	57	<p>7月 7日小石川後樂園にて隣友会開催（34名参加）</p> <p>8月 31日母ハナ死去（享年 82）</p> <p>9月 6日北沢丸山教会元木氏方にて隣友会開催。20日第3回</p> <p>10月下旬西来荘に行き、川中島 - 松本 - 伊那に入り、北原敬士氏と共に天竜峡を下航。</p> <p>長篠古戦場を訪れ帰京</p>



1942	17	58	<p>6月10日宮崎安右衛門氏と上の博物館を見学</p> <p>6月20日華族会館で能楽見学（喜多実「顕如」）</p> <p>7月28日木曾御岳山に登り野尻湖、柏原、妙高温泉へ</p> <p>9月初旬西来荘より伊香保へ浴、帰途渋川駅で尾上菊五郎に会う</p> <p>10月初旬遊帝都観覧、マレー戦記、ダヴィンチ展、満州国々宝展</p> <p>11月2日東京発京都へ、大徳寺、智積院、天珠院、隣花院 霊雲院、東海庵を参拝 - 大阪 - 中部地方へ</p> <p>11月11日清談会（日本橋偕楽園）に出席</p> <p>11月12日東京府立六中にて東京中東学校剣道教師にむけ「勝海舟ノ剣術ニ就テ」を講演</p>
1943	18	59	<p>1月5日隣人会第1回再興、15日・25日隣友茶話会（早セ田）</p> <p>2月5日隣友会（早セ田）7日青梅町常保寺にて「介山居士を囲ムノ会」に出席</p> <p>4月15日隣人社隣友小会（西多摩村塾）</p> <p>19日北吟吉氏「戦争の哲学」出版記念会にて祝辞を述べる</p> <p>22日阿伎留病院に入院。28日午前8時15分、腸チフスのため永眠。遺骨は禅林寺墓地に埋葬される。法名は修成院介山文宗居士</p>

※「羽村市郷土博物館紀要第8号 特集 中里介山」を基に作成  
※は介山の著作

表3は、1922年（大正11年）から介山死去の1943年（昭和18年）までの年表である。この期間を「アンデンティティを探す時期」とする。この期での介山は大半を塾経営に費やしていた。前の期で理想の確立と大菩薩峠成功を受けた介山は小説ではなく、現実世界でそれを伝えようと多摩地域へ戻った。その結果が彼の塾設立という行動から読み取れる。

彼は多摩地域で自身の執筆活動の場としての草案をいくつも作った、そしてその近辺には塾を作っていた。まず、その介山が作った塾についてこまかく述べる。

まず多摩で初めに作った塾は1924年（大正13年）浅川の金南寺の裏に開いた「隣人学園」という塾である。この「隣人学園」は高尾における一つの成功例として見ることができ、その内容と理念は、次の開校趣旨書にほぼ書いてある。

#### 隣人学園

隣人学園は隣人の愛を旨として天を畏れ、己を責め、国家及び人類の一員としての修業をつとむる機関と致したいものだと思ひます。敬天、愛人、克己、を三綱領として掲

げたいと思ひます。敬天とは神仏、或いは天道を信じ長上を敬する心をいひ、愛人とは人間同士博き愛を以て交るべきをいひ、克己とは我儘を抑えて己の業務智徳を修むるの謂であります。右の趣旨で、第一着手に幼年部から初め、浅川村野口別荘で日曜毎に十歳前後の少年少女の為に修学しております。行くゆくは各地に及ぼして青年以上の為にも、種々の機関を設けてお互に学んで行きたいつもりです。これは教へる人も教はる人も、すべて無報酬で、各々が先生でありまた同時に生徒である心持でやつて行きたいと存じます。どなたでも来り教へて下さい。またどなたでも来り学んでください。

大正十三年第一月

文献 2)「中里介山の原郷」 p 73～74 より引用

いわゆる官制の学校教育とは違い、介山の夢が詰まった理想的創造教育構想の第一歩として実践された民間児童教育機関であり、その塾教育的精神はのちに故郷に設立する西隣村塾にも継承されていくこととなる。

隣人学園を実際に運営した人としては設楽政治、設楽英之、細川喜治、野口兵蔵の4人の名があげられているのだが、最後までやり通したのは設楽政治と細川喜治の2人だったという。その、設楽政治によれば、1922年（大正11年）秋ごろから学園を始め、以降ずっとおこなってきたのだが、1928年（昭和3年）この細川、設楽の2人が兵隊に取られて中断していた。兵隊から帰ってきて1930年（昭和5年）に再開したのだが、学園の全盛期は、この2人が兵隊に取られてしまう前までであった。

隣人学園の発祥の場所は、野口（兵蔵とは別人）という人の別荘で、その後金南寺にこの野口氏が寄付して本堂となったのだが、ここで日曜学校という形ではじめられた。平日は夜おこなったが土曜日、日曜日は多くの人が集まったという。生徒は7、8歳から12、13歳くらいまでで人数としては7、80人ほどの人数がやってきたそうだ。指導者は介山、野口兵蔵、土地の学生、土地の有力者などが関与したそうだが、1人、また1人と減っていき、最後に残ったのが設楽政治と細川喜治の2人だった。介山もたまに来ては話をする程度だったという。

介山はこのような人々に運営、指導を任せていたわけだが、その際よく言い聞かせていたことがあった。それは、童心を傷つけないように。ということだった、また、介山自身も子供たちとよく話すこと、遊ぶことを好んでいた。介山は子供が好きだったのだろう。なお、これらの経費は全て介山が出していたようだ。

1925年（大正14年）4月介山は突如高尾山を去ることとなる、原因はケーブルカー架設工事だ、折から草庵の上でケーブルカー架設のための工事が開始され、介山はその伐採と騒音に耐えきれず、高尾山の下山を決意したのだ。介山は1922年（大正11年）から高尾山妙音谷に草庵を結び文筆活動を行っていた。工事が始まった後に執筆した「白骨の巻」に以下のような高尾山批判を表現している。

一体、その必要もなきところへ、金儲けのための無用工事を加へるとするのは、俗界にあつても評すべからざることであるのに、身、僧侶にありながら、多年、その山の恵みに生きながら、それを切り崩して金儲けをもくろむとは言語道断……一体、仏寺なるものが、その祖師の恩恵によつて過分の待遇を受け、広大な領分を持ち、諸法の観化を貪りながら、なほそれに飽き足らず、開山以来、尊重したその山の樹木を伐り、山を崩して金儲けをしようとは何事だ

文献 2)「中里介山の原郷」p 76～77 より引用

このように、自然環境破壊に対する怒りを大菩薩峠に載せるなど、塾が順調だった為に介山の怒りも強かったのだろう。しかし意外なことに、この「隣人塾」は介山が高尾を去った後も続けられており、太平洋戦争直前まで存続していたというので、一定の成功を収め、介山自身も 1928 年（昭和 3 年）に発表した「千年檜の下にて」という作品で次のように述べている。

「千年檜の下に庵を結んで満三ヶ年といふもの、自分は可なり楽しい月日を送った」  
「併し、高雄の山の千年檜の下は忘れられない。こゝにはどうしても現はしきれない  
夢のやうなローマンスも人間苦の観照もあつた」

文献 2)「中里介山の原郷」p65 より引用

この文面から、いかに高尾での生活が介山にとって充実した日々であつたかを表している。高尾での生活には彼自身も満足していたのだ。

高尾山を去った後、介山は奥多摩の沢井黒地蔵へ向かい、そこで黒地蔵草庵を結び、暮らし始めた。この黒地蔵草庵というのは青梅線の二俣尾駅（当時の青梅線終点）で降りて 20 分ほどのところに建っていた。杉皮葺の平家建てで、6 間 2 間で廊下があり、居間には小さな炉があつたという。他に 3 坪ほどの別棟があり、その一部が湯殿になっていたそう。しかし、この草庵は昭和 3 年 10 月に取り壊されてしまい、現在では石垣や井戸を残すのみとなっている。

介山はこの沢井の地で施設を 4 つ建設している。まずは黒地蔵草庵。次に 1926 年（大正 15 年）に武州御岳山の麓（三田村御岳漆の窪）に「小滝道場」を建設。外観は山小屋風の建物で、建物の中には小さい炉が切っており、鉄製の寝台が 1 つ、炊事道具は若干置いてあるだけだったらしい。だが、寝台の下には、旧式のピストルと長さ 1 尺 8 寸の白鞘の刀を護身用に置いていたそう。このピストルは、後に青梅鉄道延長の抗議の際に発砲されることとなる。夜になると、そばを流れるせせらぎの音と、気味の悪いふくろうの鳴き声だけが聞こえるという、なんとも気味の悪い小屋だったそう。

小滝道場という名前の由来は、その道場の奥に滝がかかっていたことによるものだが、介山はこの滝で滝業をするなど、自分の修行場としても利用していたようだ。

その翌年（昭和2年）には介山は谷久保の奥にあった1軒の家を200円で買い取り「八雲谷草庵」と名付け使用していた。どうやら介山は手斧づくりの梁や柱に興味を持ちこの家を購入したようだ。黒地蔵草庵から徒歩20分ほどであり、こちらの草庵を執筆や読書の場としたようだ。この草庵は1929年（昭和4年）に西多摩村に移されたが、その地で作られる耕書堂はこの草庵の名残である。

さて、沢井の地で4番目に建設したのが「隣人道場」である。この施設は道場としての本来の役割と図書館としての役割も持っていた。その背景には、介山は早くから塾教育や農園の経営・鍛錬道場・それに介山文庫なるものの設立の夢を抱いていたということがある。その夢の第1段階として黒地蔵草庵前の空地に武術道場を開いたのだ。地主や青梅鉄道株式会社との間に問題が起こり、完成したのは昭和2年3月だが、間口5間奥行3間の建物だった。建物内の壁には、介山独自の信仰を表すかのように、聖徳太子、孔子、キリストの画像と身売遊女図を掲げ、その前には髑髏と木魚などを置いていた

多摩川を挟んで愛宕山に向かって建てられていたこの道場も若者によく利用された。しかし、またしても隣人学園のときのように介山の夢は破られてしまうこととなる。それは青梅鉄道延長工事である。隣人道場の足下で青梅鉄道の線路延長工事が始まり、その影響で道場下で崖崩れが生じてしまったのだ、これに対し介山は、抗議の意も込めて空に護身用のピストルを発砲するのだが、結局、この事件がきっかけで介山は沢井での塾経営は諦め、故郷の羽村へ向かうことになるのだが、この道場はその羽村の地で作られる西隣村塾の敷地内に移され印刷所になっている。

夢破れた介山は故郷である羽村へ戻った。そこで高尾・沢井での経験を活かし、かねてからの念願であった塾教育を行うために1929年（昭和4年）、養蚕を行っていた大きな家を買取り、建て替えて塾を開設した。この塾に介山は「西隣村塾」と名付けた。

西隣村塾という名前の由来は、1857年（安政4年）吉田松陰が設立した、「松下村塾」に習ったものとされている。介山の作品にも「吉田松陰」があることから、介山の中で吉田松陰というのは理想の教師像だったのかもしれない。

また、上述したように以前、沢井で経営していた隣人道場は、この西隣村塾の敷地内に移されたわけだが、彼はこの敷地を「植民地」と名づけていた。その思いはこの地に広大な農地と山林を求めていたからかもしれない。

西隣村塾での介山は高尾、沢井のときとは違い、本格的に農本主義教育を行い始めた。塾則もこれまでの塾とは違い、農本主義を押し出している感じが見受けられる。

以下の文が西隣村塾の塾則である。

#### 西隣村塾塾則

西隣村塾は、實際生活と関連して各自の天分を最も発達せしめ、人類及び万有の理法に貢献合致せしむることを教育の目的とす。

各学生は、この目的の為に1日数時間の生産的勤労を為し、其他を聴講と図書館自修と趣味 養に費す。

学費は各自の勤労によつての自給自足を原則とするといへども、ある期間は費用を徴収することあるべし。

文献 2)「中里介山の原郷」 p 27 より引用

以上の塾則を見ればわかるが、この塾は内容としては1日数時間の生産的労働、つまり農業を行うことが決められており、その他に講師による聴講と図書館を利用した自修となっている。また学費は基本、生徒が労働した結果の農作物ということであったが、ある期間は費用を徴収するということがあったようだ。西隣村塾に通っていた人はどのような人かを見てみると、意外なことに全く環境の違う人たちが通っていた。年齢は15,16歳から25,26歳までがおり、入塾の目的もバラバラであった。上級学校への進学を目指す者もいれば、失業中の食いつなぎの者、感化院のつもりで入れられた者などがいたようだ。当然だが、目的が違う人間たちが多ければ多いほど、塾生の要求は多くなり複雑になってくる、介山の西隣村塾は、その雑多な要求を満たすことができなくなり、結果的に経営は失敗に終わってしまった。

以下表4が西隣村塾初期の塾生である。

表4 西隣村塾初期の塾生

名前	年齢(大体)
松尾淳	25,6歳
三輪郁子	21,2歳
山中国男	19歳
佐藤富士達	19歳
星野政雄	17,8歳
羽村透	17,8歳
内田五三男	16歳
河野吉直	15歳
松尾秀一	不明
島田歌(塾の印刷部門を受け持っていた)	不明
鈴木伝(同上)	不明

※「中里介山伝」を基に作成

この中の羽村透という人物は純粋の白系ロシア人で、介山の親友であった羽村与三郎という人物がカムチャッカから連れてきたという少年である。このことなども、当時としては注目されたようで、新聞には「異人もまじる介山氏の天才教育」と大きく載った。この

異人というのは当然、羽村透のことである。三輪郁子という女性は結婚早々夫を嫌って塾へ逃避してきた女性であった、介山にまわりつくような感じで、これをやっかむ塾生もいたようだ。

様々な事情の人物を受け入れていたことから、介山の方針としては来る者拒まず、だったようだ。

西隣村塾で授業内容としては、塾則にも書いてあるように、聴講、自修、農業であった。聴講というのは、最初のほうは漢詩、製茶など様々なことが行われていたようだが、1か月もたつと介山も不在にすることが多くなったり、また予告していた柳田泉氏や他の講師が来られなくなることが増えたりで、継続して行われていた講義は青梅基督教会牧師の井上活泉氏の漢詩だけになってしまっていた。

このように講義の面に関してもだが、他にも、来賓の前で人夫同様に皿洗いをさせられたりなどのことから、塾生の不満が募っていった。

6月の末日には、介山から塾生に向けて「都合により印刷部だけ残して、本日限りで塾を閉鎖する」と言った。塾が開塾してからわずか2か月であった。

介山の塾経営は上記のようにことごとく失敗してしまっているのだが、介山は何故塾を多摩地域で作ったのだろうか。もちろん資金的な面では大菩薩峠が人気作となったことが大きく影響を与えているが、介山の目的はあくまで「成り上がる」ことだと考える。つまり階層移動（社会的上昇）をすることだが、この階層とは目に見えるものではない、だからこそ介山はかつて自分が行っていた教育を、周りの人から見てもわかるような功績、つまりは塾という形で残そうと考えたのではないだろうか。

つまり、介山にとって塾はあくまで「成り上がる」ためのツールだったのだ。何故かという、彼は実際には自分で子供たちに物事を教えるということをあまりしていなかったからだ。たまに塾に来ては子供たちと話をしたり一緒に遊んだりしていた、という記録があることから子供は好きだったのだろうが、実際に子供たちに指導していたのは隣人塾では設楽政治と細川喜治が、西隣村塾では青梅基督教会牧師の井上活泉が漢詩を教えていただけであった。本当に教育に対する情熱を持っていたのなら、介山自身で文章の書き方を教えるや、旅行の話をする。など、教えられることは沢山あるはずだ。にもかかわらず、教育の現場は他人に任せるということは、介山は教育より、教育の場を作った功績に価値を置いていたと推測できる。つまり塾設立という功績を持って社会的上昇を図ったのではないだろうか。

そもそも農本主義を唱えていても介山は本当の農本主義者とは言い切れない。介山の植民地で共に農業をした人が、介山は自分の手を泥で汚すことのない「美的百姓」だったと評している。

介山は多摩地域に戻ってから4つの塾を設立したわけだが、何故多摩地域だったろうか。

これらの背景にはいくつかの多摩地域が持っているいくつかの特性があると考えられる。まず立地特性である。これは、1時間弱で東京都心まで行くことができるということ、これ

は多摩地域の大きなアドバンテージである。もう1つは人的特性、介山自身が言っているように（1章参照）多摩地域が昔より政治演説などが活発におこなわれていたことだろう、このことから多摩地域の人々は新しい思想を受け入れやすかったのではないだろうか。最後は時代特性、この時期の多摩地域は産業面でも発展し地域時代が豊かになってきた時期であり、資源も豊富になっていた。介山が人々に思想を伝える場として、自然と資源を活用できる多摩地域を選んだとも思われる。

東京で大衆小説家として活躍した介山であったが、この時期、大衆小説家は所詮2流という風潮で、1流の文学者というのは純文学を書く人という風潮だったのだ。介山は大菩薩峠で成功し、出来ることなら、そのまま東京で生活し更なる成り上がりを望んだはずだ。

しかし、大衆小説家という枠から出られない介山にとっては自身が望むような理想を東京で実現することは諦めざるを得なかった。そこで介山は多摩に引っ込むのだが、これは以前介山が教員職に就いてたとき、東京の子供と多摩（農村）の子供の差を痛感していたことから東京という街で味わった閉塞感を打ち破り、多摩に自身の新たな世界を求めたのだと考えられる。

1930年（昭和5年）介山最後の塾である隣村塾が失敗に終わってしまった。この塾の失敗を機に介山の成り上がるための活動はなくなっていく。

このあとの介山は成り上がり活動というより、自身の趣味に重きを置くようになる。中国・米国旅行や自分のファンたちとの座談会などの交流を多く行っていく。

この中国旅行で彼の心境で少しの変化が見られたので、介山の中国旅行について記す。1931年（昭和6年）国外旅行であったが、彼の中ではどうやら国内旅行の延長程度の認識しかなかったようである。

「私は今回もその悠々たる気分と怯懦なる特性をもって只一人ブラリとあなたの国（中国）へ旅行に出かけたのでございます。恥ずかしながら私は足一步海外へ出るといふことは、四十七歳の今日になるまでこれが初めてでございますが、その出発に於ては日本各地の旅行の延長と少しも変わりませんでした」

文献2)「中里介山の原郷」 p98より引用

様々な風景、建造物を堪能していた介山だが、この時期の中国は満州事変（1931年昭和6年）直前の排日に満ちた情勢にあった。現に介山が上海に到着したその日、そこで日本の代理公使と財政部長が狙撃されるという事件も起こっていた。

介山にしてみれば政治などには関心は無く、ただ文人的な趣味から中国に来ていたのだが、そんな彼が中国の現実を痛感する出来事が起こる。それは南京に向かう列車の中で、周遊券に下車のサインがないから無効であるという車掌の執拗な詰問を受けたことである。

介山はこの出来事についてこのように述べた。

「今迄天の星ばかり見て歩いてみたのが、急に一つの穴の破れから地上の現在といふものを見せつけられた趣き」

「この一事件は無頓着な旅客としての小生の感情に少からぬ影響を与えた、日本人に対する感情といふものは、斯うまで露骨になつてゐることを恐れ出して来た最初の問題である」

文献 2) 「中里介山の原郷」 p 109 より引用

介山は、この列車内での出来事こそ今の中国人の反日感情の象徴だと受け止めた。この気持ちは帰国後も溜まっており、帰国後すぐの「隣人之友」という雑誌に「隣人の心」という題の支那旅行報告が掲載されるが、これと 12 月に刊行した「日本の一平民として支那国民に与える書」の両方の核心とも今回の出来事だった。

「日貨排斥といひ、排日宣伝といひ、日本人虐待、或は虐殺と云ひ、皆この手である、必ずしも日本人に対してのみとはいはないが、日下は日本人向つて集中されてゐる、それは従来国際的にはどういふ経緯があり、どういふ恩怨が残つてゐるか知らないが、個人的教養としての支那人が如何に文明の度が低いかと明確に物語つてゐるのである」

文献 2) 「中里介山の原郷」 p 110 より引用

このように、中国の民は文明の度が低いと言いきっているのだ、そして介山の中国に対する思いはこれでは終わらず、この後もしばらく続いていく。これは、介山が政治的な面ではなく文化的な面で中国に強い憧れを抱いていたからこそ、このような現実に対して無念さがにじみ出たのではないかとも思える。

また介山は、中国より帰国した 8 年後の 1939 年（昭和 14 年）にはアメリカ大陸への旅に出た。だが、介山の中でアメリカの旅はアメリカを知るといふよりは、中国をより深く知るための旅だったようだ。

「余は米国を見んがために、米国へ行ったのではない、米国を通じて支那を見んがためである。余はあまり欧米には深い関心を持つて居ない、洋行を嫌ふといふことはないけれど、支那を愛する念の深さには及ばない」

文献 2) 「中里介山の原郷」 p 126 より引用

以上が介山の中国旅行についてである。

介山はこの時期、大菩薩峠と旅を軸に生活していた。他にも講演会や大菩薩峠ファンの人々との座談会に出席したりと活動的であった。しかし 1943 年（昭和 18 年）体調が悪化し、腸チフスで入院、そのまま息を引き取ることとなる。享年 58 歳であった。



この期の介山は年表を見てわかるとおり、非常に行動的である。いくつも塾を作り、様々なところ、外国にまで旅行に行き、衆議院選に立候補し、講演をする。やはりこれらの行動は全て社会的上昇を目指してのものだったと思われる。特に塾には10年近く費やしている。これほどまでに塾に拘った背景には文学界でトップになれないことを悟った介山が選んだ成り上がりのための手段だったことが考えられる。

介山は1922年（大正11年）に東京から多摩地域に戻ったのだが、なぜ多摩地域だったのだろうか、介山自身がこの地で生まれ育ったことも要因の1つではあると思うが、それだけではなく東京と多摩地域の位置的要因があったのではないだろうか。第1章でも既述したように、この時代は社会階層の中で新中間層が増加していた。東京から溢れた新中間層の人々は多摩で居を構え、そこから都心へ仕事に向かう。また、産業面では新興財閥の台頭で工場が多く設立されたりするなど、経済的にも著しく発展した。このように東京という不動の中心部に対して、時代の変化をいち早く吸収していた多摩地域に介山は「東京という中心に対抗できる土地」という認識を持っていたのだろう。これは東京で自身の限界（作家としての限界）を知り、多摩地域に戻ってから居を多摩地域から出さなかったことなどからも推測できるだろう。

中里介山は多摩地域の可能性をいち早く見出し、行動を起こしてしていたのだ。

### 第3章 白洲次郎

本章では白洲次郎(1902~1985)について考察する。少なくとも中間層としては最上位に位置していた白州商店の息子である白州次郎がどのような成り上がりの努力を続けてきたのかについて考察するとともに、次郎にとって多摩とはどういう場であったのかを文献6、8の記述を基に考察していく。

#### 第1節 イギリスでの人脈作りの時期

##### 第1項 出生期

この項では、第1節では触れなかった次郎の家系を探り、何故彼がイギリス留学を志すようになったのかを記す。表1は、出生からイギリス留学するまでの出来事を記した表である。

表1 白洲次郎年表：出生期

西暦	元号	年齢	出来事
1902	明治 35	0	2月17日父・文平、母・芳子の次男として白州次郎生まれる
1910		8	1月7日樺山(白州)正子生まれる
1914	大正 3	12	精道尋常小学校を卒業
1916		14	御影師範学校附属小学校高等科卒業 神戸一中(第一神戸中学校)入学。同級生に後に作家・文化庁長官となった今日出海がいる
1921		19	神戸一中卒業 英国渡英

(出典、『白洲次郎 占領を背負った男』より一部引用)

次郎は1902年(明治35年)2月17日、父・文平、母・よし子の次男として生まれた。二男三女の兄弟である。(図1参照)

ここで、次郎の家系を簡単に触れる。次郎の祖父・白州退蔵(以下、退蔵)は父親に三田藩儒官を持つ家柄である。三田藩最後の藩主九鬼隆義に登用された退蔵は藩重役、大参事として手腕を発揮していった。その一方で、ミッション系女学院の創立に携わるなどしていた人物である。退蔵の息子であり次郎の父である白州文平(以下、文平)は白州商店を経営、貿易業で成功を収めた人物であった。幼い頃、退蔵は文平にアメリカ人教師の家庭教師をつけていた事もありハーバード大学、ボン大学への留学経験もある。ボン大学へ通っていた頃の留学仲間として、近衛篤麿(1863~1904)(近衛文麿の父)や新渡戸稲造(1862~1933)、樺山愛輔(1865~1953)らがいた。帰国後は三井銀行、大阪紡績会社に入るもすぐに退社。そ

の後は白州商店を神戸で設立した。綿花を輸入する貿易商社である。こうした事から、白州家は旧中間層に位置していたのではないだろうか。

芦屋市立精道尋常小学校を卒業後、第一神戸中学(以下、神戸一中。現在の兵庫県立神戸高校)へ進学した。在学中は同世代との付き合いが悪く、周囲との間に溝が生まれていた。成績表には、「やや傲慢」、「驕慢」、「怠惰」といった文字が並んでいたという。神戸一中を卒業後、進学先に迷っていた次郎は、父・文平の勧めで留学をする事となる。本当のところは、「(文平の)手につけられないほどの硬派ぶりに手を焼き島流しにしたんだ」と次郎が娘の桂子に語っていたようだ。祖父・退蔵がミッション系女学院創立に関わった事から白洲家には外国人女性教師が寄宿しており、次郎はネイティブの英語を学ぶ事が出来たと同時に、欧米への憧れは強まっていたのかもしれない。

こうして次郎は 1921 年(大正 10 年)、神戸港から 1 ヶ月ほどかけて英国へと渡った。

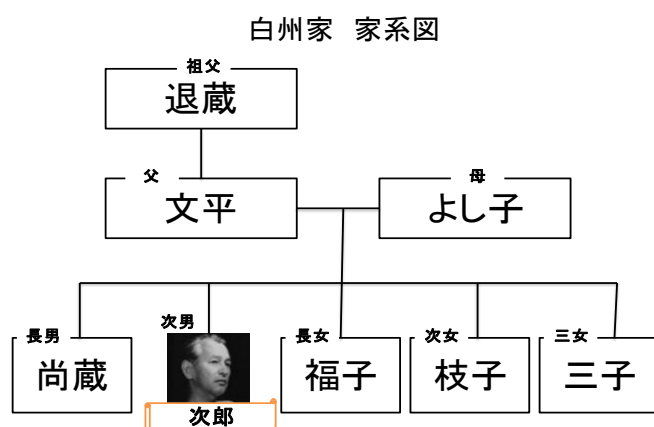


図 1 白洲家 家系図

## 第 2 項 イギリス留学時代～帰国

イギリス留学をした次郎は、終生の友であるロバート・セシル・ビングと出会う。彼と出会った事は次郎にとって大きな影響を与えた。第 2 項では、イギリス留学で得た経験は何だったのか、その経験は彼にどのような影響を与えたのかを探る。表 2 は、イギリス留学時代の出来事をまとめたものである。

表 2 白洲次郎年表：イギリス留学時代から帰国

西暦	元号	年齢	出来事
1923	大正 12	21	ケンブリッジ大学クレア・カレッジへ入学。西洋中世史、人類学などを学んだ 終生の友、ロバート・セシル・ビング(ロビン)と出会いプリンシプル(英国流ライフスタイル)、カントリー・ジェン

			トルマンの思想に影響を受ける
1924	13	22	9月20日から24日までロビンの城館に宿泊
1926	15	24	ケンブリッジ大学クレア・カレッジ卒業、大学院へ
1928	昭和 3	26	昭和恐慌の煽りを受け白州商店倒産、帰国

(出典、『白洲次郎 占領を背負った男』より一部引用)

ケンブリッジ大学には31のカレッジがある。次郎は、その中でも最難関といわれるクレア・カレッジへと入学する事となる。留学当初は一人ぶらぶらと過ごしていたという次郎。英語で会話できるか不安だからというわけではなく、「遠いイギリスまで来て負けるものかという気負いと、日本とは違う風習に戸惑いつつも、それを表に出しては見せまいとする気持ち」(文献18 『次郎と正子』)があったのだと桂子は語っている。

次郎は、ケンブリッジ大学留学中に終生の友ロバート・セシル・ビング(以下、ロビン)と出会う。きっかけは、ロビンが学友からいじめられたのを止めろと行って間に入り、それから意気投合したからであった。

妻である正子はロビンについて、以下のように語っている。

彼は次郎とは正反対の、地味な人柄で、目立つ事を極力さけていた。ほんとうの意味でのスノビズムを、次郎はこの人から学んだと思う。いや、すべての英国流の思想の源は、ロビンにあるといっても過言ではない。身ごなしといい、教養といい、古きよき時代の英国紳士の典型といえよう

文献9) 『遊鬼』(白洲次郎のこと)

ここでいう「ほんとうの意味でのスノビズム」とは何だろうか。スノビズム(スノップ)は一般的、上等の財産や教養があると信じている人物の事を表現したり、紳士気取りや俗物などの悪い意味で呼ばれているが、以下のような意味でも用いられている事もある。

自分より社会的、経済的に上の階層の人にあこがれ、そのまねをしたり、仲間入りをしたがる人

文献15) 『世界大百科事典』

ロビンの家系は、ストラットフォード伯爵家の称号を持つ貴族であった。そうした伝統的な上層階層に位置していたロビンは、どちらかと言えば前者の意味でのスノップを持ち合わせていたのだろう。次郎はそうした前者の意味でのスノップを持ち合わせていたのだろうか。むしろ次郎は中間層から上層に成りあがろうと、上層の生活スタイルを真似し紳士を気取っていた。事実、イギリスで留学した次郎はロビンの貴族的ライフスタイル(プリンシプル)に憧れ、格好や仕草までロビンと似たものであったと正子は語っている。こうし

た事から、正子は悪い意味でのスノビズムを「本当の意味でのスノビズム」と皮肉を込めて言ったのではないだろうか。

正子が言うように、ロビンの存在は次郎に大きな影響を受けた。その大きな影響を受けたであろう「思想の源」は、2つある。それは、プリンシプルを持つ生き方と、カントリー・ジェントルマンという生き方である。

まず、プリンシプルを持つという生き方について。講義前、教授たちは必ず“gentleman”と呼びかけていたという。また、当時は試験の得点だけでなく、食堂でチューターと夕食をともにしなければならず、必ず白のタキシードに身を固め参上しなければならないなど、紳士としての規律を求められていた。自然と、次郎も紳士としての規律を守るようになっていったのだろう。こうした理由から、次郎は帰国後生涯を通してプリンシプルを持つ事を非常に重要視するようになった。

後の対談で、プリンシプルについて次郎はこう語っている。

プリンシプルは何と訳してよいのか知らない。原則とでもいうのか。日本も、ますます国際社会の一員となり、我々もますます外国人との接触が多くなる。西洋人とつき合うには、すべての言動にプリンシプルがはっきりしていることは絶対に必要である。日本も明治維新前までの武士階級等は、総ての言動は本能的にプリンシプルによらなければならないという教育を徹底的にたたきこまれたものらしい。(略)残念ながら我々日本人の日常は、プリンシプル不在の言動の連続であるように思われる。(略)何でもかんでも一つのことを固執しろというのではない。妥協もいいたろうし、また必要なことも往々ある。しかしプリンシプルのない妥協は妥協でなくて、一時しのぎのごまかしに過ぎないのだと考える。

文献16)『プリンシプルのない日本』

ここで次郎はプリンシプルを「原則とでもいうのか」とあいまいな表現をしているが、日本語でははっきりと言い表せないような感覚だったのだろう。

そしてもう1つは、カントリー・ジェントルマンという生き方についてである。

正子は、カントリー・ジェントルマンについて次のように語っている。

鶴川にひっこんだのも、疎開のためとはいえ、実は英国式の教養の致すところで、彼らはそういう種類の人間を「カントリー・ジェントルマン」と呼ぶ。よく「田舎紳士」と訳されているが、そうではなく、地方に住んでいて、中央の政治に目を光らせている。遠くから眺めているために、渦中にある政治家には見えないことがよくわかる。そして、いざ鎌倉という時は、中央へ出て行って、彼らの姿勢を正す、——ロビンもそういう種類の貴族の一人で、隠然たる力をたくわえていた。

文献9)『遊鬼』(白洲次郎のこと)

また、英国紳士ダグラス・サザランドが書いた本には、このように書かれている。

紳士は、普通都会に住んでいるものではない。自分と家族にとってどんな不便をもちとわず、田舎に、しかも田舎の限られた場所にしか住みたがらない。(略)ロンドン周辺の諸州は通勤人口を抱え、住宅開発計画が進み、狐が消えてしまったから、もはや紳士の生活には適していない。暖房のない通勤列車とか鉄道ストライキとかの苦痛に苛まれている隣人たちを見ていれば、たとえ自分自身はそれに無関係だとはいえ、精神の平穏を乱されてしまう。

文献17)『英国紳士』

後で詳しく述べるが、次郎と正子はそろって鶴川へと疎開する事となる。恐らくその理由はこのカントリー・ジェントルマンの思想を受けたからではないだろうか。

イギリス留学、ロビンとの出会いは次郎にとって計り知れない影響を持つものであった。特にプリンシプルを持った事は、今後の人生においてとても役立つものとなったのである。

## 第2節 日本での人脈作りの時期

第1節では、イギリスで得た人脈は彼にどのような影響を与えたのか探った。第2節では、帰国後日本で得た人脈が次郎にどのような影響を与えたのか探っていく。表3は、帰国後から鶴川村へ移るまでの出来事をまとめたものである。

表3 白洲次郎年表：ジャパン・アドバイザー入社～鶴川村転居

西暦	元号	年齢	出来事
1928	昭和 3	26	ジャパン・アドバイザー入社
1929	4	27	第三回太平洋会議に参加 樺山丑二の紹介で11月19日正子と結婚
1931	6	29	2月5日長男・春正誕生 ケンブリッジ時代の学友ジョージ・セールに誘われセール・フレーザー商会に転職、取締役就任
1935	10	33	10月23日父・文平没 日本工業取締役就任(後に日本水産取締役外地部部長)となり、1年の大半を海外で過ごす
1936	11	34	4月10日吉田茂駐英大使に任命される 吉田茂と親交を深め、英国大使館が常宿となる
1938	13	36	1月3日次男、兼正誕生
1940	15	38	6月3日長女、桂子誕生
1942	17	40	食糧不足を予見し、南多摩郡鶴川村能ヶ谷(現・町田市能ヶ)

			谷町)に農家を買う
1943	18	41	日本水産退職。帝国水産理事就任 鶴川村転居

(出典、『白洲次郎 占領を背負った男』より一部引用)

優秀な教授陣に囲まれいつしか学者を目指したいと思っていた次郎であったが、金融恐慌の煽りを受け父・文平が経営する白洲商店が倒産し、帰国することとなる。

帰国後、次郎は文平と喧嘩をしまい上京することを決め、英国留学の経験もあることから、ジャパン・アドバタイザーという英字新聞社に入社する。1929年(昭和4年)に樺山正子(後の白州正子。以下正子)と出会い、結婚する。もともと2人の交際のきっかけを手助けしたのは正子の兄、樺山丑二であった。次郎とは同じ頃に英国から帰国した仲である。また、文平と正子の父、樺山愛輔とともにボン大学の留学生同士だったこともあり、自然と接点があったのかもしれない。文平の頃からの人脈を資本として正子と付き合ったのである。

こうして新中間層であった次郎は、人脈が拡大していき上層グループと付き合いようになっていく。

正子と結婚したのち、ケンブリッジ時代の友人ジョージ・セールからの手紙が届き、セール・フレーザー商会という貿易商社の日本法人を手伝ってくれと依頼され、ジャパン・アドバタイザー社の仕事が落ち着いていたことと、文平が貿易業に携わっていた事の興味もあり、取締役として就任したのである。このとき29歳であった。

このころ、彼は共同漁業社長の田村啓三から強烈な誘いを受ける。日本食糧工業を吸収合併することを機会に海外へ進出するため、次郎の力を借りたいという趣旨であった。田村社長の熱意に気持ちが動かされた次郎は、セール・フレーザー商会の仕事が落ち着いたこともあり、申し出を受け入れることとなる。こうして1937年(昭和12年)3月、日本食糧工業へ入社し、同年12月に共同漁業と合併。日本水産株式会社の取締役外地部部長に就任した。このとき35歳であった。輸出先の拡大が主な仕事で、1年4ヵ月ほどしか日本に滞らせずドイツ、オランダ、デンマーク、イギリスなど世界各地を飛び回っていた。

しかし、1941年(昭和16年)に太平洋戦争が勃発すると、水産統制令が農林省から出され、日本水産株式会社は、日本海洋漁業統制株式会社と帝国水産統制株式会社に分割される。次郎はその件に怒り辞表を提出した。

その後、1942年(昭和17年)に東京で初めての空襲が起こり、戦争が始まれば食糧不足になると見込んだ次郎は、鶴川へ引越し農業を始めたのである。

### 第3節 フィクサーとして活躍した時期

#### 第1項 GHQとの対立

次郎は、正子と結婚することで上層グループと付き合いようになった。そんな中、次郎

は敗戦処理を担う事となる。この項では、日本とGHQの間に立つ次郎がどんな行動をしていたのかを記す。表4は、終戦から終戦連絡中央事務局次長を退任するまでの出来事をまとめたものである。

表4 白洲次郎年表：終戦～貿易長長官退任

西暦	元号	年齢	出来事
1945	昭和 20	43	4月15日吉田茂逮捕拘留 8月15日終戦 9月17日吉田外相に就任 吉田茂に請われ、12月終戦連絡中央事務局参与に就任 12月16日近衛文麿没
1946	21	44	日本国憲法制定作業に立ち会う 3月1日終戦連絡事務局次長に昇格 5月22日第一次吉田内閣成立 12月経済安定本部次長就任
1947	22	45	5月20日第一次吉田内閣総辞職 終戦連絡事務局次長退任

(出典、『白洲次郎 占領を背負った男』より一部引用)

鶴川へ疎開するのち、次郎はいよいよ終戦後の日本復興を任される事となる。GHQと日本政府の間に仲介したり、東北電力会長や通商産業省設立などフィクサーとして活躍していく次郎を、この節では触れていきたい。

話を進める前に、吉田茂(1878~1967)と近衛文麿(1891~1945)との出会いについて触れておこう。

吉田茂(以下、吉田)と次郎の出会いについてだが、次郎はある雑誌インタビューで吉田茂との出会いについてこう語っていた。

吉田さんの亡くなった奥さんは、牧野伸顕の娘さんで、牧野伸顕は鹿児島出身で、大久保利通の二男なのです。僕の女房はやはり鹿児島出身で権山愛輔の娘です。そんな関係で牧野伸顕を知っておったから吉田さんも知っていたということです。吉田さんが英国の大使をしている時分(昭和十一~十三年)によくロンドンに行ったんです。そのころ、私は日産コンツェルンの外国関係の責任者だったんです。まだ若くて、三十歳ちょっとくらいですよ。その時分にロンドンに行ってよく話したりしまして、はじめて大人の付き合いがはじまったということでしょうね。

文献8)『風の男 白州次郎』



帰国してから日本食糧工業(後の日本水産)取締役時代の間、海外へ行く事が多く当時イギリス大使館で務めていた吉田茂と仲良くなりイギリス大使館でしばしば定宿するようになった。次郎と正子が結婚後、樺山邸で出会ったのが最初である。このときは単に挨拶程度で、吉田と緊密な関係が続くとは思わなかった。当時東条英機は開戦阻止に動く人物—吉田を中心に、牧野伸顕、樺山愛輔ら—を“ヨハンセン・グループ”と呼び警戒していたのである。軍部から警戒され孤立してしまいストレスが溜まっているところを、次郎はジョークを言い放つなどしてストレス軽減をさせていた事で関係が深くなっていったというエピソードがある。

一方、近衛文麿(以下、近衛)は後陽成天皇の12世孫にあたる人物で、父の近衛篤磨没後、近衛家を継承した人物である。近衛文麿の私設秘書で幼馴染の牛場友彦という人物の紹介で知り合った。以降、次郎は近衛内閣のブレーンとして活躍していくこととなり、次郎が政治と関係を持ち始めたのは近衛内閣が発足してからだという。

この3人に共通しているのは、日米開戦に反対しているという事である。

1945年(昭和20年)8月15日、敗戦の日。当時国務大臣だった近衛文麿に折衝役を任せてもらえるよう懇願したが断られる。重光葵が外相を辞任したのち、次郎は近衛文麿に対し後任に吉田を任命するように要請した。吉田は就任直後から外務省改革に着手。人事を一新させた上で、次郎を終戦連絡事務局参与に任命させる事となる。

終戦連絡事務局とは、政府とGHQの間にたって折衝を行うための役割を持つ役所である。アメリカ側にはGHQ民政局という、日本の民主化を進めるための部局が存在していた。この民政局には局長コートニー・ホイットニー(1897~1969)(以下、ホイットニー)と、課長のチャールズ・ケーディス(1906~1996)(以下、ケーディス)らがいた。この2人は長らく次郎と対立する相手であった。

1945年(昭和20年)10月4日、近衛文麿はダグラス・マッカーサー(1880~1964)(以下、マッカーサー)に呼ばれGHQ本部がある第一生命ビルを訪れ憲法改正するようにと強く説かれたのである。次郎は、憲法改正に消極的であった幣原首相、憲法学者である佐々木惣一に進捗を督促する。日本独自の憲法案を作らなければ、GHQが動く可能性があったからだ。結局、松本烝治国務大臣を中心とする憲法改正案(松本案)を提出したもののGHQ側がそれを拒否し、GHQ草案(マッカーサー案)を提示される事となる。次郎(政府側)は、GHQ草案の検討に時間が掛かるので待つてほしいとホイットニー宛に書簡(ジープウェイ・レター)を送るも、時間稼ぎでしかないとされ、功を奏す事は無かった。その後何度も交渉を続けるもほとんど却下され、GHQの考えをベースに作業が進んでいく。こうして1946年(昭和21年)3月6日、憲法改正案が世間に公表された。その後枢密院、帝国議会を通り、8月24日、憲法改正が採択された。その間、次郎は終戦連絡事務局次長に昇格した。1946年(昭和21年)12月18日には、経済を根本から支える総合的機関として経済安定本部の次長も兼ねることになる。

話は前後するが、1946年(昭和21年)5月3日に日本自由党総裁だった鳩山一郎が総司令

部から追放命令を受けた事で、吉田が自由党総裁に就任している。当時総理大臣、外務大臣、終戦連絡事務局総裁を兼ねていた吉田は、終戦連絡事務局総裁の座を次郎に渡そうとしたが

「僕は政治家じゃないんだし、そんな責任だけ背負わされることはいやだ。そんなのなることない」

文献8)『風の男 白洲次郎』

と、これを拒否する。1947年(昭和22年)5月、吉田内閣が総辞職すると、次郎は終戦連絡事務局から身を引いた。

## 第2項 通商産業省設立と東北電力会長就任

この項では、主に通商産業省設立と東北電力会長就任時代について詳しく記す。「日本の経済復興には安定した供給が必要である。安定供給なくして日本の経済復興はない」と語る次郎が東北電力会長となる時期を追ったものである。表5は、通商産業省を設立してから死去するまでの出来事をまとめたものである。

表5 白洲次郎年表：通商産業省設立～死去

西暦	元号	年齢	出来事
1948	昭和 23	46	10月15日第二次吉田内閣成立 12月1日初代貿易長官就任 輸出拡大を図るため、通商産業省設立案の中心的存在となる
1949	24	47	2月16日第三次吉田内閣成立 5月24日貿易長官退任
1949	24	47	5月25日通商産業省設立
1950	25	48	吉田の特使として訪米、ジョン・ダレスと会見、平和条約の交渉に当たった
1951	26	49	4月11日マッカーサー解任 電力再編の分割・民営化をするため、東北電力会長就任 9月8日首席全権委員顧問としてサンフランシスコ講和条約へ出席。英語演説の原稿を日本語に改めさせた
1952	27	50	軽井沢ゴルフ倶楽部理事就任 10月30日第四次吉田内閣成立 ロビンと再会。最後の出会いとなる
1953	28	51	3月欧米視察

			5月21日第五次吉田内閣成立
1954	29	52	12月7日吉田内閣総辞職
1959	34	57	4月10日東北電力会長退任
1964	39	62	4月5日マッカーサー没 日本テレビ監査役就任
1966	41	64	赤坂にマンションを建てる 2階次郎、3-4階兼正夫妻、5-6階春正夫妻が住む
1967	42	65	10月20日吉田茂没 10月31日国葬
1969	44	67	3月21日ホイットニー没
1980	55	78	最後の英国旅行、ロビンと再会
1982	57	80	2月軽井沢ゴルフ倶楽部理事長就任
1985	60	83	11月16日から正子と伊賀・京都旅行 11月26日、胃潰瘍と内臓疾患により前田外科病院に入院 同月28日午後4時24分白州次郎没。遺言書には「葬式無用 戒名不要」と書かれている
1996	平 8		6月18日ケーディス没
1998	10		12月26日白州正子没

(出典、『白洲次郎 占領を背負った男』より一部引用)

1948年(昭和23年)、再び吉田が内閣となった第2次吉田内閣が始まると今度は初代貿易庁長官に就任した。次郎の考えでは日本の経済復興のためには汚職まみれの商工省をぶっ壊して、輸出を徹底的に推進し外貨を得るべきだとの考えだった。しかし、単身で乗り込んだ次郎には味方がいない。さすがに一人で戦う事は難しく、味方をつける必要性があった。そこで目をつけたのが、商工省物資調整課長の永山時雄(以下、永山)(1912~1999)であった。次郎が貿易庁長官に就任すると噂を聞いた当時の商工大臣大屋晋三(1884~1980)と事務次官の松田太郎(生年不明)は、次郎が何者でどんな考えを持っている男なのかを調べるため、永山を送らせたのである。永山は率直にどういう考えを持っているのか聞いたところ、前述の通り輸出を徹底すべきであると主張。さらには、汚職疑惑がある連中を切っ飛ばすという話題も出た。永山も主張すべきところは主張していたのだが、言うこととはスジがありしっかりしていると、次第に次郎の魅力を感じていったのである。

次郎は長官に就任するとすぐに永山を貿易庁の貿易課長に置いた。結局、次郎が貿易庁長官となったのは3ヶ月だけであった。しかしその間は何度も永山を連れ吉田茂と商工省の改組について3人で話していたという。こうして1949年(昭和24年)5月25日、通商産業省が誕生した。次郎は一切の引継ぎを拒否する。

休む間も無く、次に取り組んだ仕事は電力事業再編成であった。

戦争中は管理統制の下、日本発送電株式会社(以下、日発)が日本全国の発電・送電を一元的に行なっている。それを需要家に配給するのは九配電が行なっていたのだが、GHQ から過度経済力集中排除法の指令を受け早急の対策が必要になっていた。そこで、通産省の官房長となっていた永山は次郎に相談を持ちかける。2人は日発と九配電を9つに分割し民営化すべきだとの結論に至った。GHQ からの命令により電気事業再編成審議会(以下、審議会)が設置され、基本方針と具体策を審議する事となった。その頃、通産省の官房長に永山が就任していた。マッカーサーから電力再編成を早急に行えという指令があり、永山は次郎と相談した。2人とも日発を解体し、いくつかの私企業を発足させ競争させるのが良いだろうと判断した。

審議会の委員長を誰にしようか苦慮していた吉田茂は、当時公職追放中だった池田成彬(1867~1950)のもとを訪ね、適任者は誰かいないかと聞いたところ慶應義塾の後輩でもあった松永安左エ門(1875~1971)の名をあげた。だが、「再編成が終わったらすぐに辞めさせるべきだ。権力を持ったら濫用する恐れがある」との注意を付け加えていた。

ここで、松永安左エ門(以下、松永)について簡単に説明しておく。松永安左エ門は 1922 年に東邦電力を創立した人物で、同社を五大電力会社の一つに育て上げた人物であった。しかし、1938 年(昭和 13 年)の電力国家体制という軍部統制に真っ向から反対して以降、実業界からは身を引いていた。

審議会のメンバーには4人の委員がいた。小池隆一(生年不明)、工藤昭四郎(1894~1977)、三木隆(生年不明)、水野成夫(1899~1972)の4人であった。委員の推薦に対し、松永の意見に推薦しやすい人物を選んでいったという次郎と永山であったが、その思惑は外れる事になってしまう。予定通りに審議会は進まなかったのである。

結局、日本発送電を温存しようとする三木ら4人の案と、日本発送電を解体し九配電を独立させるべきという松永案の二本を答申に加える事となった。松永は自らの案の賛同者を集めるため、積極的に動いた。GHQ は当初2つの案に反対であったが、松永の説得により松永案に傾いていった。さらに、通産大臣を兼ねるようになった池田勇人(1899~1965)の説得にも成功した。こうした動きもあり、松永案を採択する動きが固まって行ったのである。

次郎はこうした動きをどのように見ていたのだろうか。戦後の経済復興には電力不足を解消し、安定的な供給を目指さなければならないとの考えがあった。日発を完全解体した上で、9つの電力会社を民営化して競争させるしかなかった。電力料金を全国的に平均にしまうと産業は育たない。また、新しい電源開発には発送と送電を一元化して外貨の導入を目指すべきだという観点から、次郎は松永案を支持していた。首相の吉田にも松永案を採択するように説得するなど、この松永案を答申に加えるよう働きかけたのが次郎と永山であった。

こうして、GHQ からの督促(ポツダム政令)により松永案が実行される事となる。そこで、

9つの電力会社の人事問題解消と未開発電源の帰属を決めるための公益事業委員会が設置され、この再編成の人事で次郎は、東北電力の会長を務める事となった。

東北電力会長時代の大きな問題として、只見川水系開発問題があった。只見川は群馬県と福島県の境界にある尾瀬沼を水源とし、新潟県と福島県の県境を北へ流れ、阿賀川へと合流する河川である。この地で只見川水系のダムを建設しようとしていたが、ここで東京電力と対立する事となった。東京電力の主張は、只見川流域の古い水利権を持っているというものだった。次郎は東京電力会長に直談判するも、互いに一步も譲らず交渉は難航する。むしろ、公益委が東北電力の案に反対を表明、東京電力が東北電力を提訴するなど、東北電力側は追い込まれていた。当時の東北電力社長内ヶ崎賛五郎(1895~1982)や大竹作摩(1895~1976)福島県知事と対抗策を練るも具体的な対抗策が出なかった。最終的に次郎は、東京電力の水利権無効を認めさせ、東北電力の工事を認可させるという強硬手段に出た。当時の野田卯一(1903~1997)建設大臣を説得させ、東京が主張していた水利権を東北電力に切り替えさせるという手段であった。吉田首相の後押しもあり、ついに工事認可が出される事となる。この問題も解決し、安定的な電力供給が出来たことから、次郎は東北電力会長を降りる事となった。

#### 第4節 本章のまとめ

ここまで、次郎の生涯を「成り上がり」という視点で見してきた。新中間層に位置していた次郎は、成り上がり者として成功を収めたのだろうか。

確かに、正子との結婚を機に上層グループとの付き合いが始まり人脈が増え、発言力もあったように感じる部分もあるかもしれない。しかし、発言力はあっても最終的な決定権を持つほどの地位(東北電力会長や終戦連絡中央事務局次長)には上がる事は出来なかったのである。また、日本の戦後復興を任されるようになるものの、フィクサー(仲介者)としての活躍で成功しただけであり、決定権を持つという事は無かった。

これらの理由から、成り上がり者としては失敗したのではないだろうかと考えられる。

また、何故次郎が東京中心部ではなく多摩に移り住んだのか。これに関して、気になる記述があったので紹介しよう。

イギリスじゃ、なんていうのかな、カンツリー・ジェントルマンというものがいるんだよ。これを田舎紳士とっちゃ、おかしいんだが……。 (略) いまは、イギリスもよほど世の中が変わりましたが、戦争前の貴族社会とか、富裕な社会では、ガチガチ働かなくてもいい人は、みんな田舎にいたんだ。 (略) つまり、イギリスの田舎の生活のよさ、それが非常に頭にしみ込んだところへもってきて、親子三代目でしょう。なるべく早く田舎で、百姓をしようと思っていたんだ。

文献10)『総特集 白洲次郎 日本で一番カッコイイ男』

恐らく東京への利便性が良かった事と、イギリス流ライフスタイル(=カントリー・ジェントルマン)を確立出来る場所ということで鶴川に移り住んだのだと言える。

## 第4章 まとめ・考察

### 第1節 2人の共通点

2章、3章で中里と白洲について述べてきたが、そこから多摩地域の特性を見るために、まずは2人がどんな人物だったのか、2人に共通する特徴から考えていきたいと思う。

2人の生き方を見ていくと、両者とも仲介者として存在していることがわかる。

中里介山の場合、小説によって読者に思想を広めたり、塾経営で既存の思想を教えたりと、既存の思想をピックアップしてわかりやすく人々に伝える役割を担っている。つまり、学者の思想や一般的でない知識などと大衆との間に入り、知識の仲介者としての役割を担っていたと言える。

白洲次郎の場合、代表的な事例としてGHQと日本政府の間に入り双方の意見を伝えるという役割を担っていたこと。またそれ以前は、ジャパン・アドバタイザーに所属しイギリス留学の際に身につけた英語を使い英字新聞の編集者として活躍していたことなどがあげられる。

以上のように、どちらも仲介者としての性質があることがわかる。

2人が仲介者という立場を選んだことには、新中間層の成り上がりとの関係があると推測される。第1章で述べたように自身の能力だけでは成り上がれない時代であった。能力以外で特に白洲次郎が重視したものは華族などの上層の人との人脈であった。その人脈形成の手段として仲介者を選んだのではないだろうか。介山においては能力を補うことと人気を得る手段として大衆小説作家という仲介者の道を選んだのではないだろうか。

この仲介者という立場は、新中間層である彼らが社会的上昇を果たすための手段として都合がよく、とりやすい立場だったと思われる。

### 第2節 2人の成り上がりの評価

本稿では2人について成り上がりを目指した人物としてとらえてきたが、では彼らの成り上がりとは何だったのか。

介山にとっての成り上がりとは、作家として一流と認められることだったのではないかと我々は推測した。その視点で考えると、大衆小説家としては不動の地位を手に入れた介山だが、当時の一流作家は純文学を扱う純文学作家であった。介山も純文学作家としての地位を得ようとしたが、結局介山はなれずに終わってしまった。理由としては主な読者層である新中間層と介山の間でズレが生じていたのだ。彼らは純文学作家としての介山より、『大菩薩峠』などの大衆小説家としての介山を求めたのだと思われる。

白洲次郎にとっては、上層の家族や政治家と同等の権力を得ることが成り上がりだったのではないかと推測した。次郎は正子や吉田茂など上層とのつながりを生かし、仲介者としての役割を使い上層の人々との人脈は形成できたものの、その上層の人々と同等の立場としての権力は得られなかったことから、次郎の成り上がりも彼にとっては不十分だった

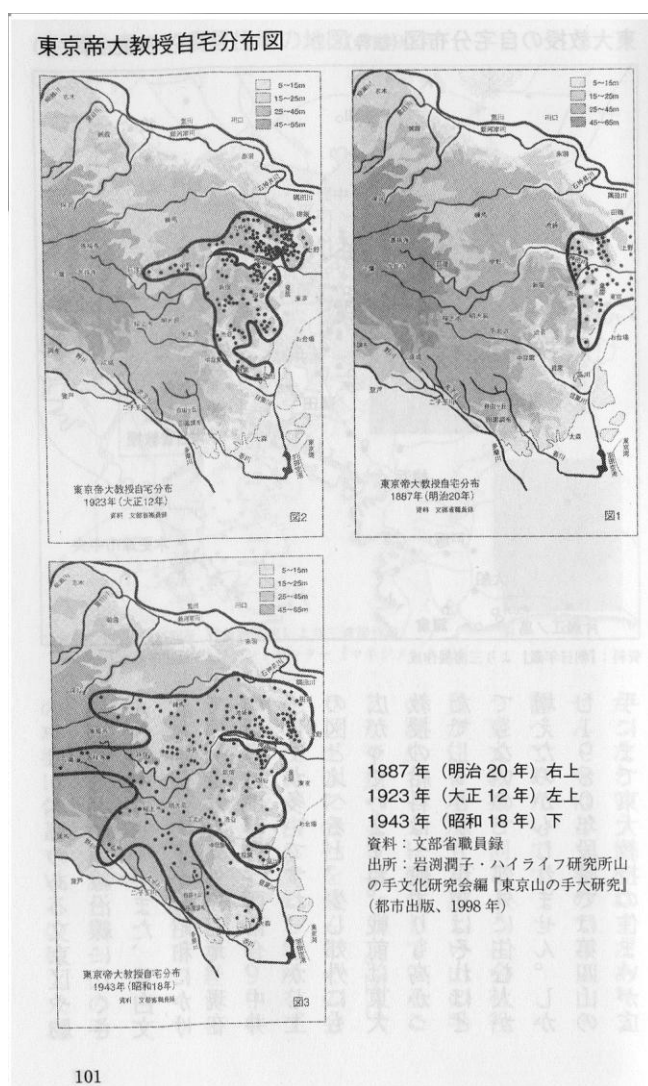
のではないかと考えられる。

このように、我々は2人の人物の成り上がりについては、双方とも不十分だったのではないかと考察する。

### 第3節 多摩地域と成り上がり新中間層の関係

これまで述べてきたように、新中間層だった2人は成り上がろうとしたが、完全に成功したと言えるものにはならなかった。その2人が同じ多摩地域に住むことを選択したのは偶然なのだろうか。

ここで1887~1943年にかけての東京帝大教授の自宅分布の推移を見てみる。(図1)



すると、都心から徐々に郊外へ拡大しているのが見て取れる。このことから、教授つまり新中間層の住む場所が郊外まで拡大していったと読み取ることができる。この流れを踏まえて2人について考えてみると、多摩地域は介山と次郎の両者にとって不都合がなく、人脈をさらに拡大する場にもなりえた場所であったという点において共通する。こうして多摩地域に新中間層が増えていったが、その要因のひとつとして新規参入に対する抵抗が弱かったと推測される。

また、中心である東京との距離感も1つの要素である。東京への行きやすさもあるが、周辺で育てた新しい種を情報として広めていくことができることと、中心へ持ち込みやすい距離でもあった。立地的に近いということもあるが、鉄道の整備が整っていたり、感覚的に中心との距離がさほどなく感じる場所であったことが重要になっている。

図1 東京帝大教授自宅分布図 (文献12 P101より引用)

このように、多摩地域は社会的上昇を目指し中心へ移行しようとする新中間層にとっては社会的上昇をはたすうえで必要な要素が詰まった、都合のいい場所だったことがわかる。



これらのことから、多摩地域は新中間層にとっての中心へ移行するためのスプリングボードの役割を持っていたということができると考える。多摩地域に新しい発想を持ち込み、育て、それを人脈などが情報として中心に届け、中心での話題性をつかみ、中心へと発想を持ち込むことによって成功を収め、社会的上昇をはたすという流れができる。

新中間層にとって多摩地域とは、中心で成り上がるための基盤をつくる場所として重要な地域になっていたと推論する。

## 参考引用文献

- 1) 尾崎秀樹『中里介山～孤高の思索者～』草書房、1980
- 2) 桜沢一昭『中里介山の原郷』不二出版 1987/7/25
- 3) 柞木田龍善『中里介山伝』読売新聞 1972/3/15
- 4) 中村文雄『中里介山と大逆事件』三一書房 1983/5/31
- 5) 松本健一『中里介山』朝日新聞社 1978/1/15
- 6) 北康利『白洲次郎 占領を背負った男（上）（下）』講談社 2008/12/12
- 7) 北康利『レジェンド伝説の男白洲次郎』朝日新聞出版 2009/1/2
- 8) 青柳恵介『風の男 白洲次郎』新潮社 2000/8/1
- 9) 白洲正子『遊鬼』新潮社 1998/7/1
- 10) 西口徹『総特集 白洲次郎 日本で一番カッコいい男』河出書房新社 2002/4/30
- 11) 原純輔『日本の階層システム I 近代化と社会階層』東京大学出版会 2000/6/15
- 12) 三浦展『郊外はこれからどうなる』中央公論新社 2011/12/10
- 13) 『日本全史』講談社 1991
- 14) 『社会学小事典』有斐閣 1977
- 15) 『世界大百科事典』平凡社 1988
- 16) 白洲次郎『プリンシプルのない日本』新潮社 2006
- 17) ダグラス・サザランド『英国紳士』秀文インターナショナル 1998
- 18) 牧山桂子『次郎と正子 - 娘が語る素顔の白洲家』新潮社 2007

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、担当教員の諸橋正幸先生・中庭光彦先生・松本祐一先生には大変お世話になり深く感謝いたします。また、インターゼミ教員の先生方、大学院生の方々には数多くの助言を頂きました事に感謝いたします。

そして最後に、社会工学会寺島実郎学長には貴重なご意見を数多く頂きました。ここに心より感謝の意を表します。